令和元年度

明日の新潟の飛躍につながる
魅力ある学校づくり推進事業

成果報告書

新潟県教育庁高等学校教育課

はじめに

新潟県教育委員会では、「一人一人を伸ばす教育～一人一人の個性に応じた、質の高い豊かな教育の推進」を基本理念とし、「ふるさとへの愛と誇りを胸に、夢や希望を持って粘り強く挑戦し、未来を切り拓いていける、たくましいひとづくり」を目指しております。

県立高校等においては、平成28年３月に策定した「県立高校の将来構想」に基づき、夢の実現に向けてチャレンジする若者を育成することができる、魅力と活力ある学校づくりを推進しており、平成30年度から県立高校13校において「明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業」を実施しています。

主な事業内容は次の３点です。

１　教育環境の充実に向けた教育システムの研究や、地域連携をとおして社会に開かれた教育課程の研究を推進する。

２　市町村や地元企業からの協働の提案等を踏まえた取組を推進する。

３　「県立高校の将来構想」に示した５つのそれぞれのタイプについて、これからの高校に求められる役割や自校の目指す姿を実現するための取組を推進する。

事業２年目を迎えた各校の取組内容及び成果をまとめた本書を有効に活用し、県内の各学校において魅力と活力ある学校づくりが一層推進されることを期待しています。

令和２年３月

新潟県教育庁高等学校教育課長　藤井　人志

目　　次

1	新潟向陽高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	1
2	巻総合高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	5
3	新津高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	10
4	村松高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	17
5	村上高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	23
6	阿賀野高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	29
7	正徳館高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	34
8	栃尾高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	40
9	吉田高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	46
10	塩沢商工高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	52
11	十日町高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	58
12	久比岐高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	64
13	羽茂高等学校	・・・・・・・・・・・・・・	70

（様式１）　　新向高　第２０５号

令和２年３月１６日

高等学校教育課長　様

学番　１０　新潟向陽高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

新潟向陽高等高校

【テーマ】　単位制への改組に向けた魅力的な学校づくり

【目標】

令和２年度に、新潟向陽高等学校は、単位制による全日制課程に改組される。改組に伴い、ＩＣＴ環境をはじめ、各種環境を整える。

【取組の概要】

単位制への改組方針の実現

１　進路実現を見据えた基礎学力の養成

(1)　国語・数学・英語において各年度３単位以上を全員必修とし、基礎学力を保障する。

(2)　数学で習熟度・進路別にクラス編成を行う。

(3)　魅力的で多彩な選択プランを設定し、生徒の意欲・関心を高め、進路実現を図る。

２　探究的な学習による「主体的・対話的で深い学び」の実践

３　ＩＣＴルームの設置による多様な学習形態の実現

(1)　ＩＣＴルームでは、授業における探究的な協働的学習、学習成果の発表などを可能とする環境を整える。

(2)　放課後や補習において、生徒の実態に合わせた個別最適な学習を可能とする。

(3)　上記を実現するため、校内研修体制を整え、全ての教科及び特別活動で全職員がＩＣＴを活用できるようにする。

４　週単位数の精査による放課後の有効活用

５　他県視察（神奈川県立横浜旭陵高等学校、埼玉県立川越南高等学校）

【取組の成果】

・単位制高等学校への改組に向けて、多様な授業選択と進路実現を可能とする教育課程を設定することができた。

・ＩＣＴルームの整備が進み、ｉＰａｄを使用し、生徒の「主体的・対話的な深い学び」を促進するための授業実践が行われるようになった。また、研修・公開授業などが行われ、授業改善に向けた職員間の意識が高まっている。

ＩＣＴルームの整備について

１　取組の内容

(1) 県外視察

日　時　令和元年 11 月 11 日（月）神奈川県立横浜旭陵高等学校
　　令和元年 11 月 12 日（火）埼玉県立川越南高等学校

訪問者　風間睦勇教諭（教務主任・理科）、中村崇志教諭（地歴）

内　容　本校におけるＩＣＴの利活用ならびに授業改善に資するよう先進校を視察する。

(2) ＩＣＴワーキンググループの設置・活動

日　時　令和元年 11 月 20 日(水)　第１回　会合　（以降５回実施）

内　容　ＩＣＴルームならびにＩＣＴ機器の管理･活用のためのワーキンググループを開設。教頭１名、図書視聴覚分掌の教諭３名、図書館司書１名、その他教諭３名の８名で活動を行った。ＩＣＴルームならびに機器の使用規定を検討し、研修を企画した。また、次年度のＩＣＴ活用に向けた計画の策定を行った。

(3) ｉＰａｄを活用した公開授業の実施

日　時　令和元年 12 月 24 日（火）　２限（9:45～10:30）

授業者　風間睦勇教諭

科　目　物理基礎（1 年生）

内　容　ＩＣＴルームを活用して、「意欲の向上」「個々のペース」「自学自習」を目標とした授業をデザインした。図書館の広いテーブルで、座席は自由として、問題演習を行った。まず、普段の授業で使っている紙の演習プリントに取り組ませ、それが終了した生徒に、２枚目のプリントの代わりとして、ｉＰａｄで解答、自動採点をさせた。

成果１　生徒は積極的にノートと教科書を開いたり、相談をしたりした。

成果２　生徒が取り組んだ問題量は、紙の演習プリントを使用した時よりも多くなった。

成果３　生徒は満点を目指して、意欲的に問題を解き直していた。

生徒は楽しみながら積極的に問題演習に取り組んだ。複数名で覗いたり、持ち運んだりできることも、ｉＰａｄの利点だと思われる。

課　題　学力の定着につながるかどうかは今後検証する必要がある。様々な教科で ICT を簡単に効果的に活用したり、生徒が自ら課題を見出して発展的に考えたりする授業デザインを研究することが、今後の課題である。

(4) ＩＣＴ活用のための校内研修会

日　時　令和２年１月 24 日（金）　５限（13:25～15:15）

講　師　国立大学法人上越教育大学大学院　准教授　大島　崇行　氏

内　容　「ｅｄｕｔａｂ(ｉＰａｄとＡｐｐｌｅ ＴＶを用いたシステム)」により、一人一人の生徒がｉＰａｄで回答した内容をスクリーンに映し、教員と生徒、あるいは生徒同士でその回答を共有する。学習状況・思考の可視化や協働学習を促進するためのツールとして活用することを目指す。

(5) 「ｅｄｕｔａｂ」を生徒が体験する公開授業の実施

日　時　令和２年１月 24 日（金）～２月３日（月）　５クラスで各１回

授業者　高見　砂織　教諭

科　目　化学基礎（２年生）

内　容　ｉＰａｄとｅｄｕｔａｂの使用方法についてガイダンスを行った上で、ｅｄｕｔａｂにより個人の意見を全体で共有することを体験させた。その上で、イオンに電解する様子を図に書かせ、生徒の模範解答などを全体で共有した。

２　取組の成果

上記の授業以外でも、調べ学習やグループ発表にｉＰａｄを活用した例がある。いずれの授業でも、生徒からは主体的に課題等に取り組む姿勢が見られた。また、協働学習を行う上で有効なツールであるという感触を得ることができた。

生徒からは、以下のような感想が聞かれた。

・ｉＰａｄを使った授業は新鮮だった。
・ｉＰａｄでどんどん問題を進められて面白かった。
・みんなの考えを見ることができたりして面白かった。
・模造紙１枚にまとめて発表するより、ｉＰａｄでスライド式の発表の方が見やすかった。
・ｉＰａｄはすぐ調べられて便利だった。

さらに、ＩＣＴの活用に関連した授業の公開が行われたことで、「主体的で対話的な深い学び」を実現するために授業改善をしていこうという機運が高まっていることも成果の一つである。

３　総合所見

図書室のＷｉ-Ｆｉ化が実現し、ＩＣＴルームとして機能するようになった。ｉＰａｄ等のＩＣＴ機器を活用した授業も徐々に行われるようになっている。今後は、ＩＣＴ機器の扱いに苦手意識を持つ教員も含めて、多くの教員がＩＣＴ機器を活用できるよう、研修や活用例の共有化を進めていく。

一方で、先進校視察で「ＩＣＴを活用することが負担にならないよう、無理をせず、使えるときに使うというスタンスがよい」という報告がなされている。ＩＣＴ機器は「主体的で対話的な深い学び」の実現を手助けするツールでしかないとの認識のもと、公開授業などを通じて授業の

在り方を探究する雰囲気を教員間に醸成していく必要がある。

また、ＳＮＳの使用などから様々な問題が生じていることから、ｉＰａｄ等の管理のしかたを研究し、改善していくことが急務である。現在、アップル・スクールマネージャーやＭＤＭのシステムにより、教員がｉＰａｄを一元管理する方法を検討中である。

主に放課後や補習時に、生徒の実態に合わせた個別最適な学習を可能とするためのＩＣＴ機器の使用については、今後継続して検討していく。

４　今後の取組

(1) ＩＣＴ活用・授業改善委員会の開設

従来コンピュータの管理運用に重点が置かれていた「コンピュータ運営委員会」を令和２年４月に「ＩＣＴ活用・授業改善委員会」に改組し、ＩＣＴ活用のための研修や公開授業（研究授業）などを企画することを検討している。また、ＩＣＴの活用を授業改善につながるよう活動していく。なお、ＩＣＴ機器の使用規定（生徒・職員）の検討も継続する。

(2) ＩＣＴルーム・ＩＣＴ機器を使用した授業のための研修

令和２年５月 18 日（月）に実施予定。ＩＣＴ機器の使用法を研修し、ＩＣＴ機器を使用した各教科の授業アイディアを共有する。

(3) 総合的な探究の時間の活用

ｉＰａｄを使用して思考を整理し、表現力を身につけるための活動（シンキング・ツール「フィッシュボーン」を使用）を行う。

(4) ＭＤＭ（Mobile Device Management）システム導入の検討

生徒が安全にｉＰａｄを利用できるよう、ｉＰａｄを一元的に管理する仕組みの導入を検討する。

（様式１）　　巻 総 第 283 号

令和２年３月 16 日

高等学校教育課長　様

学番 １３　県立巻総合高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

巻総合高等高校

【テーマ】　生徒の夢を叶えさせ将来の地域産業を担う人材育成の取組
～「巻総ＣＨＡＴ」プロジェクトが地域を活性化する～

【目標】

① 「巻総ＣＨＡＴ」や高大連携授業により、生徒の課題解決能力の向上を図る。

② 企業等との連携により、地域産業の理解と望ましい勤労観・職業観の育成を図る。

【取組の概要】

① 生徒による「巻総ＣＨＡＴ」プロジェクトによる地域貢献活動や様々な催事（イベント）に参加し、地域理解を深める。

〔主な活動内容〕

にいがたカナール彩、第 29 回全国産業教育フェア新潟大会プレゼンテーション大会、TSK ゴム動力自動車コンテスト 2019、「巻総ＣＨＡＴ」トートバックの製作、「巻総ＣＨＡＴ」オリジナル米袋・ラベルの製作

② 新潟国際情報大学と連携した授業を実施

③ 学校支援アドバイザー協議会を開催し、学校運営の改善を図る

④ 地域企業の職場見学を実施

⑤ インターンシップの実施

【取組の成果】

総合学科の特徴を生かし、職業に関する４系列（食料環境、工業、商業、生活文化）の生徒による地域活動「巻総ＣＨＡＴ」プロジェクトを中心に取り組んだ。地域の様々な催事（イベント）等に参加することで、生徒の勤労観・職業観の育成を図り、職業に関する４系列から、関連分野に就職・進学する者の割合を増やすことができた。

また、地域の活性化をテーマに新潟国際情報大学や学校支援アドバイザーとの連携を図り、地域が抱える諸問題の理解及び問題解決能力の向上することによって、生徒自らが考え、積極的に行動するようになった。このことにより学校が「元気の発信地」となり、次世代の地域を担う人材の育成の貢献できた。

【主な活動の様子】

１　にいがたカナール彩参加

平成 31 年４月 29 日(月・祝)に新潟県スポーツ公園を会場に、新潟県都市緑花フェアと NIIGATA スプリングフェスティバルの合同イベント「にいがたカナール彩」が開催された。本校は学校で育てた花（写真はマリーゴールド）の販売を行いました。さわやかな新緑の中、生徒が丹精込めて育てた花を多くの方から購入していただいた。

２　「巻総ＣＨＡＴ」活動による米の生産・販売活動

年度当初の計画にあった「巻総ＣＨＡＴ」活動の取組における「オリジナル米袋・ラベルの製作」をさらに発展させ、食料環境（農業）系列、商業系列、工業系列、生活文化系列が連携（系列間連携）による米の生産・販売活動に取り組んだ。収穫する米の商品名を「まき乃夢」とし、年間を通して活動することにした。

①　田植え（５月）

販売担当者（商業系列生徒）も商品を理解するため、手で苗を植えた。食料環境系列生徒は機械で植えた。工業系列生徒がドローンを飛行させ、稲の育成状況を把握した。

②　オリジナル米袋・ラベルの製作

米が収穫できるまでの間に、オリジナル米袋とラベルのデザインを考案した。弥彦山や角田山など、巻らしさを生かしたデザインにし、消費者に手に取ってもらえるよう工夫した。作成は業者に依頼したが、紐をつける等の最終行程は生徒が行った。

③　収穫（稲刈り）

④　まき乃夢（米）袋詰め

ＪＡによる検品を受け、その後精米した米を作成した米袋に入れた。生活文化系列生徒のアイデアで、米袋に中に唐辛子が入っている虫除け袋をつけることとした。袋の制作は生活文化系列の生徒が行った。

⑤　まき乃夢（米）の販売

３　第 29 回全国産業教育フェア新潟大会「作品・研究発表部門」出場

令和元年 10 月 27 日（日）朱鷺メッセにおいて開催された上記大会で、全国の専門高校等で学ぶ高校生が、学習や実験・実習等で創意した作品、研究の成果等について発表する「作品・研究発表部門」に出場した。これまでの探究活動の成果と今後の課題について発表し、本校の特色ある活動を発表することができた。県外の方などへ「まき乃夢」を進呈し、後日、感想を手紙でいただいた。香りが良く、とてもおいしかったと好評であった。

４　インターンシップ実施

夏季休業中の３日間に地元企業でインターンシップを行った。今年度は２年生全員を対象に実施した。参加した生徒の多くは、「挨拶・言葉使いの大切さ」や「働くことの厳しさ」を学ぶことができたという感想を持つとともに、地域企業の魅力を実際に体験することができた。

５　新潟国際情報大学と連携した講義（２年次生）

６　新潟国際情報大学と連携した講義（３年次生）

７　その他

- トートバックの製作
- ＴＳＫゴム動力自動車コンテスト 2019（入賞なし）
- 巻夏祭り・巻多加良まつり参加（荒天のため中止）
- 大学研究室訪問及び講義受講（新型コロナウイルス感染防止のため中止）
- 地域企業による「校内企業説明会」（新型コロナウイルス感染防止のため中止）

【今年度の取組における成果と明らかになった課題】

- インターンシップを２年生全員に実施し、勤労観の醸成と進路意識の啓発を促すことができた。さらに、生徒の地域企業への理解を深めさせることができた。
- 巻総ＣＨＡＴ活動により、系列間連携による取組を充実させることができた。全国産業教育フェアなどで発表し、生徒の探究活動とプレゼンテーション能力の向上を図ることができた。
- 巻総ＣＨＡＴ活動に１年生が関わる場面が少ないため、計画の改善が必要である。

【年度毎の自己評価結果（数値目標）】

評　価　項　目		令和元年度 （２年目）	平成 30 年度 （１年目）
職業系列からの関連分野に進む者の割合	系列	数値目標６０％以上	数値目標５５％以上
	食料環境	34.5%	40.0%
	工　　業	70.4%	91.7%
	商　　業	46.2%	51.2%
	生活文化	72.5%	44.7%
	全　　体	52.8%	52.2%
「巻総ＣＨＡＴ」生徒アイデアの取組	－	数値目標２取組以上	数値目標１取組以上
	全　　体	３取組	２取組

※ Ｒ元年度生徒アイデアの取組

① トートバッグのデザイン

② 米の生産・販売

③ 米袋と虫除け袋のデザイン･制作

（様式１）　　新津高　第 239 号

令和２年３月 13 日

高等学校教育課長　様

学番　１５　県立新津高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

新津高等学校

【テーマ】　「大学進学を重視した学究型の高校」を目指した学校作り

【目標】

１　大学入試改革への対応及び国公立大学合格者数の増加を図る。
２　難関大学合格者数の増加を図る。
３　新津高校の良さを PR する。

【取組の概要】

第２年時は、学校のグランドデザイン化を共有し、共通理解のもとでの改革を実践することを目指し、下記の取組を計画した。

(1)　電子黒板の効果的な利用や生徒の主体的な活動が取り入れられた授業の展開を図る。また、互いの授業を見学し合い、指導力を向上させる。
(2)　生徒の学習においてＰＤＣＡサイクルに留意した課題の出し方、予習・復習の徹底のさせ方を検討し､生徒自身の学習マネジメント力向上をめざす。
(3)　「総合的な探究・学習の時間」での「課題研究」を実施する。その際、教科との連携・相互作用を重視し、学びに向かう態度を育成する。また、生徒との対話を大切にすることによって、生徒の自己肯定感を高める。
(4)　外部の発表会、大学の体験講座への生徒の積極的な参加を促すことで、視野を広げさせ目的意識を醸成する。
(5)　特進クラスの補習授業の質を高め、個別添削指導を確立する。

【取組の成果】

学校のグランドデザイン化には至っていないが、生徒の現状・今後の課題の可視化が進み、議論は日常的に行われている。今後集約に向かっていくものと思われる。

探究型の活動については、「総合的な探究・学習の時間」を核に教科間でも計画的・相互的に配置された。生徒の主体的な活動の場も増え、「型」習得の指導、「論理的」であることへの意識付け等が教科との連携の中で有機的に行われた。習得した「型」を、自分の日常生活のマネジメントに活用させようとする生徒も出てきており、探究型の活動の成果が、生徒の中でものの見方や考え方にもきちんと繋がってきている。今年度の成果の１つである。

Ⅰ　主な取組の内容

１　生徒の活動

(1) 総合的な学習・探究に関する活動

①　ねらい

生徒の思考的・主体的な学びの姿勢を育成するため、新津高校としての３年間の体系的なプログラムを作った。

「探究の見方・考え方を働かせ、社会の一員としての自己の在り方生き方を考え、次代の社会を創るという観点から課題を発見し、他者と協働して解決に向かう普遍的な資質・能力を育成する」

上記を目的として、１年生は「社会を繋ぐ」２年生は「学問を拓く」３年生は「進路を創る」をテーマに、課題探究型の学習を中心とした活動を実施した。

②　内容

ア　１年生

(ｱ) 社会人による意識啓発講演会

目的　○　高校生の「学び」とはどういうものかを理解し､より質の高い学びに向かう姿勢を育成する。

○　なぜ今「探究活動」が必要なのかを認識し、より有意義な活動を行うための意識を醸成する。

日時　令和元年６月 10 日（月）

講師　アイディアパートナーズ代表　山本一輝　氏

内容　「総合的な探究の時間」基調講演

ワークショップ「Inner words から疑問文を作ろう」

(ｲ) 課題解決学習

目的　○　「型」の習得（意識付け）　思考・表現・探究の「型」

○　社会的な視野を持ち、社会の一員として貢献する意識を持つ。－社会を繋ぐ－

内容　ＳＤＧｓを学び、世界の問題が日本の問題、地域の問題と繋がっていることを知り自分の関心あるテーマについて課題を見出し､他者と協働して課題解決する。

９月　　ＳＤＧｓ

10 月～11 月　修学旅行の行き先とＳＤＧｓ

12 月～２月　課題解決学習

12 月　　２年生ポスターセッション参加

２月　　ポスターセッション・振り返り

【臨時休校のため未実施クラス有り】

イ　２年生

(ｱ) 大学講義体験

目的　○　大学の講義を体験することで、進路目標をより明確にし、学習意欲の向上を図る。

○　「研究」とはどういうものかを知ることで、総合的な学習の時間「課題研究」の活動の充実を図る。

日時　令和元年６月 17 日（月）

内容　○　「研究」とはどういうものか。高校生ができる「研究」について
　　○　講師の専門分野の講義体験

講師

分野	講師
国際分野	東京大学 未来ビジョン研究センター　華井　和代　講師
日本分野１（教育）	日本女子大学　人間社会学部　齋藤　慶子　准教授
日本分野２（歴史）	新潟大学　人文社会科学系　矢田　俊文　名誉教授
法政治経済分野	新潟大学　法学部　田村　明子　助教
理科、環境分野	新潟大学　農学部　箕口　秀夫　教授
生活分野	長岡造形大学　造形学部　鈴木　均治　教授
医療健康分野	新潟薬科大学　薬学部　杉原　多公通　教授
数学分野	富山大学　理学部　古田　高士　教授
情報メディア分野	敬和学園大学　人文学部　一戸　信哉　教授

(ｲ) 課題研究

目的　○　現状から課題を見出し、答えのない問いに協働して試行錯誤する経験
　　○　「型」を使った探究の仕方の習得

内容　設定された分野から希望分野を選択し、クラスごとの班による課題研究を実施

４月～５月　　オリエンテーション・テーマ設定
６月　　大学講義体験
７月～　　研究活動
10 月　　東京研修（修学旅行）
12 月　　ポスターセッション（１年生参加）
１月～２月　　個人論文作成
３月　　１、２年合同発表会【臨時休校により未実施】

(ｳ) 修学旅行東京研修（課題研究研修・大学体感ゼミ）

目的　○　課題研究に関係する企業を訪問し、企業説明、研究についてのアドバイスをもらう。
　　○　大学生との懇談をとおして、研究についてのアドバイスをもらう。

内容　訪問企業：農林水産省、スウェーデン大使館、東京証券取引所等　22 事業所
　　大学：東京大学学生 29 名

(2) 特進クラスの特色化

①　ねらい

国公立大学や難関大学への進学を希望する生徒を支援し、学習意欲や高校生活すべてにおいて新津高校の中心的役割を果たす生徒の育成を目指す。

②　内容

ア　夏期合宿　目的　国立大学や難関大学への意欲向上と質の高い学習習慣の確立
　　日時　令和元年７月 31 日（水）～８月２日（金）
　　場所　月岡温泉　ホテル泉慶
　　対象　１、２年特進クラス、普通クラス希望者

イ　平常時講習

ウ 難関大学向け模擬試験の全員受験

エ 外部講習会参加（新潟大学アカデミックセミナー・数学オリンピック等）

２　教員研修

(1) ねらい

２年時は、主に探究型の活動指導のための指導方法、意識醸成に関する研修に重点を置いた。

(2) 内容

令和元年５月 11 日	言語技術教育教員研修基礎講座（つくば言語技術教育研究所）
令和元年６月 29 日、30 日	第６回進路多様躍進校会議（全国進路指導協議会）
令和元年７月 31 日～８月２日	１、２年生特進クラス夏期学習合宿
令和元年８月２日	第１４回神奈川大学高大連携協議会フォーラム（神奈川大学）
令和元年８月 10 日、19 日	教育研究セミナー（駿台予備校）
令和元年 12 月 18 日	新潟南高校「江風探究ユニットポスター発表会」（新潟南高校）
令和元年 12 月 25 日	探究活動研修会（校内）
令和２年２月 23 日	第６回 SCH シンポジウム（東北芸術工科大学）
令和２年３月	学校視察（京都市内）【新型ウイルス感染予防のため中止】

Ⅱ　取組の成果

１　生徒の活動

(1) 総合的な学習・探究に関する活動

①　評価と検証

探究型の学習では、１年時に引き続き「思考法」や「探究の手順」などの「型」を意識した指導を図るとともに、新たに探究に関する情報を日常的に目にできるような環境を整えた。

今年度は、特に生徒の中で「型」が汎用的に「繋がる」ような指導を意識した。生徒の意識の中では教科や「総合的な学習・探究の時間」、その他の活動がすべて別々の活動として捉えられており、それぞれを一生懸命やろうとするが故に窮してしまうところが見受けられる。どの活動にも応用できる「型」があることを認識させることで、生徒の中にばらばらに存在する知識や技能を繋ぐことができ、有機的な学びになっていくのではないかと考え、１年生は「国語・英語」２年生は「情報」を中心とした「教科」と「総合的な学習・探究の時間の活動」との連携を試みた。生徒は様々な教員から同じ「型」を指示されることによって、学習活動だけでなく日常的に自分の思考や表現に応用させようとする意識が生まれている。

１年生は「型」を使った表現の実践として地元の作文コンクールに応募し、入賞を果たした。

応募コンクール	応募者数	入賞者数
新津税務署税の作文コンクール	245 名	３名（昨年２名）
新津ライオンズクラブ作文コンクール	35 名	６名（昨年実施なし）内最優秀賞１名

②　生徒の感想・アンケート結果

臨時休校のため振り返りの時間が取れず、アンケートは１年生４クラスのみの実施、２年生は未実施である。感想は以下のとおりである。

・自分で決めた問題を解決しようとする過程がおもしろかった。

・自分と違うことでもまず受け入れ、そこから新しいものを創り出すことが大事だと感じることができた。
・解決策にメリットだけでなくデメリットも存在していることに気づき、そこから新たな問題が生じる。そうして自分の分野を突き詰めていったら、他の分野との関係を発見できた。
・調べていくうちにどんどん疑問が出てきて、それによってより深く課題研究ができたと思う。
・解決することが難しい問題でも、その中にある小さな問題１つ１つを解決することが大きな問題の解決に繋がるということがわかった。

１、２年生ともに、探究の本質的な部分に関する感想が増えている。指導する教員の働きかけが的確になってきていると考えられ、学校としての探究活動も徐々に充実してきていると思われる。また、具体的な活動から抽象的な概念や気づきに繋がった感想も多く、「繋ぐ」意識が見られる。

(2) 特進クラスの特色化

特進クラスの特色化は、学力はもちろん学びに対する高い意識の醸成という点でも効果が見られる。学校行事の関係で外部講習参加が限られたものになったが、特進クラスの生徒の参加が圧倒的に多い。また、１～３年生特進クラスの縦のつながりも見られるようになり、下級生にとっての良い刺激となっている。

(3) 数値目標の達成状況

① 達成状況

・生徒授業評価「興味・関心」「理解」「基礎学力」項目の満足度を上げる。
→「学校自己評価」学校生活アンケート結果（かっこ内は「よく」＋「やや」）
「よく当てはまる（そう思う）」「やや当てはまる（大体そう思う）」の回答率

	平成 30 年度	令和元年度
分かりやすい授業が多い	62％(17%+45%)	61％(18%+43%)
授業では教材や教え方に様々な工夫がされている	68％(23%+45%)	71％(31%+40%)
学力向上のための指導が熱心に行われている	82％(40%+42%)	82％(45%+37%)
家庭での学習のため、十分な課題が出されている	85％(58%+27%)	88％(59%+29%)
総合学習は充実している	70％(33%+37%)	81％(47%+34%)

・１年１月模試 偏差値 68 以上５人、58 以上 55 人→偏差値 68 以上３人、58 以上 32 人
・２年１月模試 偏差値 68 以上５人、58 以上 60 人→偏差値 68 以上１人、58 以上 33 人
・合格者数　国公立大学　100 人、難関大学　５人、新潟大学　40 人
→　国公立大学　93 人、難関大学　３人、新潟大学　25 人　（Ｒ２年３月 10 日現在）

② 評価と検証

授業評価については概ね評価が上がっており、すべての項目で「よく当てはまる（そう思う）」の数値が上がっている。模試結果は各学年とも真摯に受け止め、上位層を伸ばす指導、学習習慣の定着を図る指導を検討中である。しかし、２年生は偏差値 58 以上が入学時より 10 人以上増えており、１年生は課題とされていた英語の偏差値が伸びている。生徒の現状を分析し、明確になった課題を確実に解決していくことが生徒の伸びに繋がり、目標達成に繋がると考えられる。

２年生（国英数総合）

	１年７月	１年11月	１年１月	２年７月	２年11月	２年１月
68 以上	1	0	1	3	2	1
58 以上	23	22	30	36	38	33

１年生（英語）

１年７月	１年 11 月	１年１月
49.8	49.3	51.3

③　変化が感じられる生徒の感想

・自分の役割を理解し、自分から動けるようになってきた。
・普段の生活でも、フィッシュボーン図を使って、小さな課題から解決しようと思った。
・今までわからないことがあるとすぐ答えを探していたけれど、自分で考えてみるのもおもしろいと思うようになった。
・常識だと思うことでも一度疑問文にしてみて考えてみることで、より理解が深められるということを教科の学習や普段の生活などに生かしたい。
・論理的に考えることの大切さを知り、自分の考えは矛盾していないか考えるようになった。
・１つの関係性だけでなく、深く見ると他との関係性を見つけることができる。１つの考えや価値観にとらわれることなく、様々な視点から物事を見つめていくとこが大切だと思えた。
・物事を考えるときに一気に導き出そうとするのではなく、しっかりと筋道を立てて少しずつ関連づけるように考えるとよりよい答えを導き出せる。そこからまた新たな疑問点や具体例を出して考えを深めることが大切だと知った。
・地域という自分に身近な問題に面と向かって取り組めたことで、地域に貢献したいと思った。

Ⅲ　総合所見

１　学校・生徒の変化

探究活動の充実により、生徒と教員の対話が増えた。教員は日常的に「なぜ」と問いかけるような場面を意図的に設定し、生徒に論理的な思考や答えを求める機会を与えるよう図った。その結果、生徒は「論理的」とはどういうことかを考えるようになり、意見や感想を求められる際にも意識するようになってきた。また「繋ぐ」意識の芽生えも感じられる。自分の過去と現在、教科と総合的な学習・探究の時間など、自分を取り巻くものが繋がっていることを感じられるようになり、自ら日常的に応用させる意識を持つようになってきた。

教員間の連携も深まりつつある。探究活動の指導に対する情報共有や意見交換が活発化し、授業の見学、探究活動のＴＴなど教員同士の学び合いの機会も増えている。12 月に自主研修会を呼びかけたところ副任を中心に 15 人程度の参加があり、関心の高まりと部活動等への波及も期待できる。

今年度は国公立大学の合格者数が増加した。特進クラスをリーダーとした学習意欲の喚起によるものと思われるが、探究活動導入の試行学年でもあり、導入との関連も検証したい。

２　課題

「新津高校の良さをＰＲする」という目標が達成されていない。今までなされてきた議論を

集約し、新津高校が目指す学校のあり方等を明確にし、広報していく必要がある。今年度は、臨時休校により校外に向けての発表会が実施できなかったが、それもＰＲの場として活用したい。

１、２年時の活動の成果を、具体的な数値目標にどう繋げていくかが大きな課題である。

Ⅳ　今後の取組

１　探究活動の充実

①　職員の探究活動への意識を高める。

②　探究活動の成果を、数値目標に繋げる。

２　新津高校の特色化

①　新津高校のグランドデザインを明確にし、職員間で共有し、特色化に繋げる。

②　新津高校の特色を広く広報し、志願者増に繋げる。

（様式１）　　松　高　第１４７号
令和２年３月１６日

高等学校教育課長　様

学番　２０　　県立村松高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

村松高等学校
【テーマ】　地域と連携した進路実現を目指して　～地域と共に１ＵＰ～
【目標】 これまでの本校の取組を活かしながら、地域人材や地域資源を活用した教育活動の可能性を広げ、看護系の人材育成を期待する地域のニーズに応えていく。また、計画実施にあたっては、生徒のやる気を引き出し、生徒の夢を叶えさせる進路指導の実践によって、学校の活性化、魅力化につながる教育活動となるよう取り組む。 進路意識の啓発を行うことで、自らの課題を発見し解決に向けた取組ができるよう、総合的な学習の時間、総合的な探究の時間の充実を図る。 **【取組の概要】** ・　１年生を対象とした高校生活についての講演会の実施 ・　１、２年生を対象とした自己管理手帳を導入してのポートフォリオの作成 ・　１年生を対象とした生徒理解調査の実施 ・　１年生を対象とした上級学校見学の実施 ・　２年生を対象としたインターンシップ事前指導の実施 ・　３年生を対象とした企業等説明会の実施 ・　取組の成果発表会の実施 **【取組の成果】** ○　進路意識の啓発 ・　上級学校を見学することで、卒業後の進路として大学への進学に関心を持つ生徒が僅かに増えた。 ・　医療・看護系講演会では同窓会との連携により、医療従事者である同窓生を講師に招聘して開催することができた。同窓生の講演で進路実現への意欲を増した生徒が多かった。 ○　地域連携へ関心 ・　同窓会との連携で開催した前述の講演会を地域住民の参加の中で実施することができた。

１　取組の内容

(1)　自己管理手帳の取組

①　目的

生徒が自分自身の学びの記録の蓄積を一覧することにより、どのような学びのプロセスを経て成長していったかを読み取るために行う。生徒自身にとっても、自分の学習過程を客観的に把握できるとともに、「振り返り」を通して自らの課題を見つけ、次の学習につなげることができる。自分自身の成長の過程を追うことで、次年度の課題をつかむ一助とし、自らの進路を展望できるようにしていきたい。

②　活用状況と生徒の様子

〈１年生〉

○活用場面	○生徒の様子
・新入生意識啓発講演会　・学習習慣形成支援講演会 ・携帯、スマホ安全教室　・進路の手引き説明会 ・交通講話　・保健指導　・職場見学　・上級学校見学 ・人権教育講演会　・分野別進路ガイダンス	ポートフォリオの意味をなかなか理解できずにうまく記入できない生徒も見られた。多数の生徒は趣旨を理解してより具体的に記入しようと努力する姿が見えた。

〈２年生〉

○活用場面	○生徒の様子
・ネットトラブル防止講演会　・インターンシップ説明会 ・マナー講習会　・五泉市合同企業説明会見学 ・面接対策講演会　・面接指導	昨年の継続でもあり、多くの生徒は趣旨を把握し、具体的に記入しようとする姿が見えた。一方で話を聞きながら手帳に記入する事に難しさを感じ、充分に記入ができない様子も少なからず見られた。

③　成果と課題

１年生については、１年間継続することで、自分自身の成長を実感できている生徒も見られたことは非常に良かった点である。２年生については、１年時からの継続によって、少しずつではあるが自分の体験や考えを表現できるようになっている生徒も見られた。一方、ポートフォリオの意味がなかなか理解できない生徒に継続して趣旨を理解させ積極的に取り組んでいけるように手助けしていく必要性も感じた。今後も継続しながら意欲の向上、記入内容の充実を図っていきたい。

(2)　講演会の実施

①　「新入生進路意識啓発講演会」【１年生】

ア　目的

新入生に高校生活の過ごし方を説くことを通して、高校生としての自覚を芽生えさせる。また、自身の生き方・在り方について考えさせる。

イ　実施状況

実施日　平成 31 年４月 17 日（水）６・７限

会　場　本校視聴覚教室１

講　師　新潟会計ビジネス専門学校副校長　平　博之　様

演　題　「人との出会いでこころ上手にからだ上手に～進路実現に向けての心構え～」

ウ　生徒の様子

入学後間もないこともあり、多くの生徒が緊張感をもって真剣に話を聞いていた。

（生徒アンケートから）
・失敗を恐れることはたくさんあるけど、挑戦していきたいと思いました。また、生きるためにはコミュニケーション能力が必要だなあと今後の高校生活に生かしていきたいです。
・あきらめない心を持つこと。焦らずにじっくり前を向いて 1 歩ずつ踏みしめていくこと。自分なんかだめだと思わないこと。自分を持つこと。学校は失敗してもいいところ。がんばればいつか必ず何かが変わるということ。
・まずは「やってみる」こと。やってみて楽しさや達成感を感じられることもあるということがわかったから。

エ　成果と課題

入学後間もない、緊張感のある時期にこのような話を聞く機会を設けることができて良かった。真剣に話を聞くことができる生徒が多いことがわかったことも収穫であった。

②　「マナー講習」（インターンシップ事前学習）【２年生】

ア　目的

夏季休業中に行うインターンシップに向けて、マナー全般の重要性を理解させる。

イ　実施状況

実施日　令和元年 7 月 10 日（水）６限
会　場　本校会議室
講　師　ＮＳＧカレッジリーグ事業推進部
　　事業推進課長　多賀祥治　様

ウ　生徒の様子

インターンシップ直前でもあり、全員緊張感をもって聴いていた。自分の意思を十分に伝えるためには、先ず見た目・身だしなみが大切であること、言葉遣いが大切であることを認識し、普段の自分自身の姿を見直すきっかけとなったようである。

エ　成果と課題

理屈ではわかっていても日常生活の中で、「礼儀、身だしなみ」を「普通」にしていくには時間がかかると思われる。今後は、挨拶は勿論、普段の身だしなみについても自分自身で意識していくことができるような指導を考えていく必要がある。

（生徒アンケートから）
・言葉遣い、敬語は大切だと改めて分かりました。
・人の第一印象は見た目でほとんど決まるということをよく知ることができました。
・学校や家と違い、社会での活動の仕方が大変だと思いました。
・自分ができていない事がたくさんあったので、一つずつ直していきたい。
・まだまだ自分で直さないといけないことがあるので、インターンシップで少しでも直せるようにしたいと思った。

③　「面接対策講演会」【２年生】

ア　目的

次年度の面接試験に向けて、その重要性と実践の難しさを知り、心得や方法を学ぶ。

イ　実施状況

実施日　令和２年１月 22 日（水）６限

会　場　本校会議室

講　師　新潟ビジネス専門学校教務部次長　平馬みどり　様

ウ　生徒の様子

具体的な事例を挙げて細かく説明していただいたことを熱心に聴いていた。内容が分かりやすく、講師の先生も半数以上の生徒に質問をするなど、生徒は緊張感をもって臨めた様子で、真剣に聴くことができたようである。

エ　成果と課題

進学希望・就職希望にかかわらず、面接に向けた対策は重要性を持つ。まず、その方法を学ぶことから始めるが、習得・実践できるよう日々の生活を見直すことが必要である。生徒は日頃の甘さを感じていた様子で、３年生に向けてのよい準備ができた。

④　「医療・看護系講演会」（同窓会特別講演会）【全校生徒】

ア　目的

同窓生の先輩から幅広い経験を踏まえた講演をいただくことで、在校生に進路選択や人生の指針を得る機会を与えるとともに､本校の伝統の継承者としての意識を醸成する。

イ　実施状況

実施日　令和元年 10 月 11 日（金）

会　場　本校第 1 体育館

講　師　上越地域総合健康管理センター参与　　阿部　惇　様

演　題　「医師として五十年、私が学んだこと」

ウ　生徒の様子

同窓生の講師による講演で進路実現への意欲を増した生徒が多かった。

（生徒アンケートから）

・白血病のことだけでなく戦時中の脚気について医師が行った行動で優先順位を誤ると大惨事を招く事など医学についてたくさんのことを知ることができ､短い時間でしたがとても有意義な時間でした。

・私は大切な人を胃がんで亡くしました｡医療の技術で治らなかったのかとよく思っていましたが､たくさんの苦労があることを知りました｡私にはできないことですが､これから病気にならないように､私たち自身も気をつけていきたいです｡

・夢を 50 年も続けたというのは素晴らしいです｡僕も夢に向かって頑張りたいです｡

エ　成果と課題

同窓会との連携により、医療従事者の同窓生を講師に招聘して開催することで、進路実現に向けての挑戦を、生徒がより身近なものとして意欲を増すことができた。

(3)　上級学校の見学【１年生】

①　目的

１年生の早い段階から、大学・専門学校等の上級学校を見学することにより、希望する進路実現のために進学が必要であることを意識させる。

②　実施状況

実施日　令和元年８月 27 日（火）

見学先

【１コース】（１組）	【２コース】（２組）
１　新潟国際情報大学	１　新潟コンピュータ専門学校
２　新潟柔道整復専門学校	２　シェフパティシエ専門学校
３　国際ビューティモード専門学校	３　新潟医療福祉大学

③　生徒の様子

高校とは違った施設や設備に感銘を受けている生徒も少なからずいた。特に専門学校では実習を伴った説明で多くの生徒が楽しんでいた。案内していただく先生方の指示に従い、素早く行動する様子をうかがえ充実した内容であった。

④　成果と課題

普通科で教室での授業が多い村松高校の生徒にとっては、大学、専門学校とそれぞれの分野に特化した施設を見学できたことで、自分の進路への意識が高まったという生徒が多く見られた。進路学習としては多くの生徒が具体的に考える素晴らしい機会となった。

(4)　「五泉市合同企業説明会」（３年生・２年生）

①　目的

本校では例年、就職希望者の５割を超える生徒が五泉市内あるいは自宅から通勤可能な企業に就職を希望している。五泉市合同企業説明会は地元企業の事業内容などを理解することを目的として行われている。

生徒にとって地元企業との最初の出会いであり、直接会社の方から話を聞くことで求人票では得られない情報を得られる貴重な機会である。また今後の就職活動にむけ意志を固めていく重要な契機にもなっている。

②　実施状況

実施日　令和元年６月 19 日(水)

会　場　本校第１体育館

内　容　地元企業 19 社から参加をいただき、本校生徒３年生 34 名・２年生 50 名と五泉高校の生徒 28 名が希望する企業の説明を伺った。例年３年生就職希望者だけが参加してきたが、今年度は初めて２年生も参加した。企業説明の時間は１回を 25 分とし、３回行われた。各企業の担当者からパンフレットや動画などを使って分かりやすい説明があった。最後に質問の時間が設けられ、活発なやり取りも見受けられた。

③　生徒の様子

１つのブースに２～11 人の生徒が集まり、熱心に説明を聞きメモを取る姿が見られた。身だしなみを整えること・きちんと挨拶すること・説明を伺いながらポイントをメモすること・移動時間内に移動着座し開始を待つことなどのビジネスマナーの基本も実践できた。また、積極的に質問する前向きな生徒は企業の方からも好評価を得た。

④　成果と課題

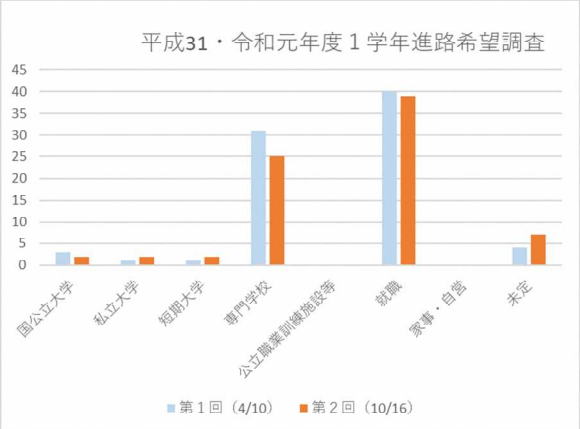
地元に就職を希望する生徒にとって、地元企業を知るまたとない機会となった。説明会後、レポートを作成し応募企業を選択する際の資料とした。その後、職場見学を経て秋に応募することになった生徒も複数名いた。また新津管外の企業への就職を希望する生徒にとっても業種の理解が深められたという面でいい機会となった。

ただし、企業間の希望者数においては明らかな差があり、次年度以降３回目の説明では

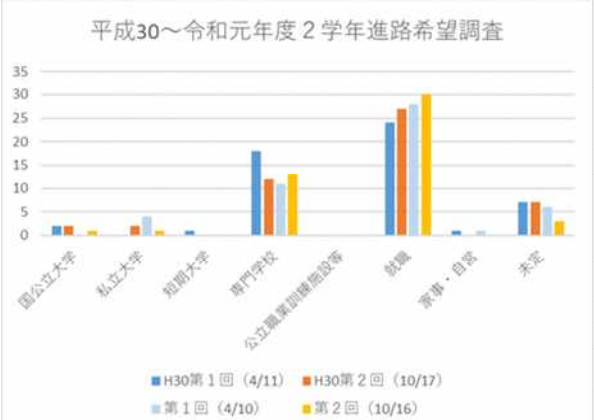
参加生徒がいなくなることも懸念される。生徒の希望動向を把握し、参加企業の見直しが必要になってくると思われる。

(5) 取組の成果

○ 進路希望調査結果



（１年生）
上級学校見学実施後、大学・短大進学に興味をもつ１年生が微増しており（４月５名→10 月６名）、事業効果と考えられる。一方、「未定」という回答の増加（４月４名→10 月７名）については、進路への視野が広がった結果ととらえられる。



（２年生）
「未定」の生徒が２年時４月までの調査では６～７人であったが、10 月の調査では３人と減った。この間に、五泉市合同企業説明会への参加や、インターンシップ、マナー講習等の体験、同窓会特別講演会を経て、自己実現に向けての意識が高まった結果と考えられ、事業効果の現れと思われる。

(6) 総合所見

○ 進路希望の決定状況

「学校生活等に関する意識調査」（2 月実施）

	H28	H29	H30	R1
１年	54.5	66.7	68.0	61.0
２年	72.6	78.0	70.3	70.8
総計	62.8	72.7	69.3	64.8

右の表は、２月に実施している「学校生活等に関する意識調査」（１、２年生対象）での、「高校卒業後の進路希望は決まっていますか」という問いに対する回答のうち、「（漠然と）決まっている」の割合を示している。今年度については総計が 64.8%となり、目標の 75%に及ばなかった。ただし、上記(5)の進路希望調査(10 月)の段階では「未定」が 8%であった。2 月の調査でも 10 月の結果が継続できるように、今後「未定」が増加した理由の精査が必要である。自己管理手帳の取組を工夫することや、テストバッテリーＭ２＋（田中教育研究所）の結果等を分析することなどに取り組んでいきたい。

○ 地域連携の意識

今年度の文化祭(臥龍祭)では、五泉市観光協会と華道部が連携し、本校の八重桜のエキスも使用されている観光協会の関連商品とともに村松の名所などの紹介も行い好評を得た。

(7) 今後の取組予定

・ 高校生活についての講演会（１年生） ・生徒理解調査（全学年） ・企業説明会（３年生） ・上級学校見学（１年生） ・インターンシップ事前指導（２年生） ・取組の成果発表会 ・地元企業で活躍している人材を講師とした講演会（全学年）

（様式１）　　村高 第 ２００ 号

令和２年３月 13 日

高等学校教育課長　様

学番　２７　　県立村上高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

村上高等高校
【テーマ】　「未来を共に造る」村高ゼミの実践 ～英語力向上を軸とした主体的学習の推進～
【目標】 １　昨年度より取り組んでいる「英語コミュニケーション能力向上プロジェクト」を推進し、国公立大や難関私立大学をはじめとする進路希望の実現に向けた英語４技能の総合的な向上を図る。 ２　習熟度別授業の導入やカリキュラム・マネジメント及び授業力向上に向けた研修を推進し、大学入試改革に対応できる教育課程を編成する。 ３　多様な進路希望の実現のため、地域探究学習の推進を通じて、主体的に学ぶ態度及び協働して課題解決に取り組む資質を身に付けさせる。 **【取組の概要】** １　進路実現に向けた英語力の向上 (1) 英語教育先進校への視察による研修 (2) 年間を通じた英語コミュニケーション能力向上プロジェクトの実施 ２　大学入試改革に対応した教育課程の編成 (1) 校内委員会（村高イヨボヤプラン委員会）による教育課程の計画的検討 (2) 新学習指導要領の研究及び授業力向上のための教員対象研修会 ３　地域探究学習の推進 (1) 村高ゼミを通じた地域課題解決に向けた研究成果の発表 (2) 村上探訪や事業所訪問を通じた地域の課題発見に向けた学習 **【取組の成果】** １　視察での新知見や指導ノウハウ等について職員間で共有を図った。生徒は、コミュニケーション能力向上プロジェクトで得た経験を、海外修学旅行プレゼンテーションで役立てることができた。 ２　校内委員会（村高イヨボヤプラン委員会）では、各教科と連携し年間指導計画を一覧表で作成し、授業改善の資料として活用している。校内研修会では、外部講師を招聘し新教育課程の研究等を進めている。 ３　生徒は、地域探究学習を通じて、キャリア教育において、主体的に学ぶ態度を身に付けることができた。

1　取組の内容

(1) 英語教育先進校への視察による研修

ア　目　的

英語教育に特徴をもった県外の高等学校及びカリキュラム・マネジメント等の研究に取り組んでいる学校を訪問し、その実際について研修する。

イ　期日及び訪問校

- 群馬県立吉井高等学校
  11 月 18 日（月）13：00～15：00
- 群馬県立中央中等教育学校
  11 月 19 日（火）12：45～14：45
- 山形県立鶴岡中央高等学校
  11 月 25 日（月）10：00～12：00
- 山形県立酒田東高等学校
  11 月 15 日（金）13：15～15：15

ウ　訪問者　本校英語科　３名、１学年　１名

エ　対応者　主に教頭、進路指導主事

(2) 英語コミュニケーション能力向上プロジェクト

ア　目　的

・生徒の進路実現及び将来の有意義な社会生活のための英語コミュニケーション能力向上
・他者に対する開かれた態度と異なる文化・考え方を受け止める力の育成
・他者とのやりとりの中から新たな発想や価値観を生み出す体験の提供

イ　内　容

今年度は海外修学旅行（シンガポール）で実施する現地大学生に対しての発表が大きな柱であり、視聴覚教材を活用しグループプレゼンテーションを中心とした諸活動を実践した。

ウ　対　象　　２学年

グループプレゼンテーション

(3) 校内委員会（村高イヨボヤプラン委員会）による教育課程の計画的検討

村高イヨボヤプラン委員会は学習指導要領や「総合的な探究の時間」の研究等を行い、新学習指導要領の検討を始めている。また現行学習指導要領においては文理選択等の教育課程編成の研究も行っている。

(4) 新学習指導要領の研究及び授業力向上のための教員対象研修会

外部講師を招聘しての研修と授業参観等を中心とした研修を行っている。

○　県立教育センター実践力向上研修を活用した校内研修
　村高イヨボヤプラン委員会が、研修の企画・運営をしている、
　令和元年６月 28 日（金）カリキュラム・マネジメント研修①
　　発表「教科等横断の実践に向けた計画の作成」
　令和元年 10 月３日（木）カリキュラム・マネジメント研修②
　　演習「ルーブリックの作成」

○　上記の他、「主体的・対話的で深い学び」授業を行っている授業者は、時間割黒板にＡＬマークのマグネットを貼り、随時、他職員に授業公開を行っている。

(5) 村高ゼミを通じた地域課題解決に向けた研究成果の発表

ア　方　法

各班６～７人の編成で、研究テーマを設定し、３月の村上フォーラムに向け調査、ＩＣＴを活用した資料作成を行う。

イ　目　的

・大学や社会で必要とされる「課題解決の方法」と「論理的思考」を体験的に学ぶ。
・協働学習の中でコミュニケーション能力をさらに向上させる。
・よりよく伝わる発表（プレゼンテーション）の技法、そのための情報収集の仕方を学ぶ。

ウ　活動の流れ

４月 26 日　（金）村高ゼミ　年間活動に概要説明と班編成（23 班）
５月　各班：フィールドワーク準備　研究論題の設定
５月 22 日　（水）取材の技講座（講師：地元新聞社編集長）
フィールドワーク（23 班が 35 か所の地元企業を訪問）
５月～６月　フィールドワークのまとめ
７月５日　（金）大学講義体験（８講座）
７月 30 日　（火）市長とのふれあいトーク：村上市教育情報センター
夏季休業中　各班で情報収集：事業所等と連絡をとり、取材を実施。
９月～10 月　取材した題材の整理、プレゼンテーションソフトで資料作成
11 月 29 日（金）村高ゼミ　校内発表会
３月 18 日　（水）村上フォーラム　地域、事業所等をお招きしての発表会
※　新型コロナウイルス感染症対策のため開催延期

エ　対　象　　２学年

市長とのふれあいトーク

夏季休業中の聞き取り調査

教室での意見交換

研究課題設定

(6) 村上探訪や事業所訪問を通じた地域の課題発見に向けた学習

ア　方　法

各３～６人の編成で事業所訪問を行い、12 月にポスターセッションを行う。

イ　目　的

高校生の視点から改めて地域産業を学び、職業意識を高めるとともに、課題の発見に努め、他者と協力しながらその課題を解決していこうとする意識を高めることで、地域活性化に貢献できる人材を育成する。

ウ　活動の流れ

４月 23 日　（火）　校外学習：フォトロゲイニング
（市内中心街の観光名所、寺社仏閣、店舗をチェックポイントとして回る。）
７月２日　（火）　プレゼンテーション・ガイダンス
７月 12 日　（金）　キャリア教育講演会：７月に訪問する事業所等の方からの講演。
７月 19 日　（金）　事業所訪問事前学習
７月 30 日　（火）31 日（水）事業所訪問：地元企業、保育園、市役所、税務署、病院など 17 か所を訪問
10 月～11 月　訪問した事業所に関する資料の整理、ポスターセッションの準備
12 月４日　（金）　ポスターセッションによる事業所訪問発表会
１月 10 日　（金）　高校生と市議会議員との懇談会
２月 21 日　（金）　小論文テスト：「問いを立てる力」を各自で養成する。
３月 18 日　（水）　村上フォーラム　地域、事業所等をお招きしての発表会
※　新型コロナウイルス感染症対策のため開催延期

エ　対　象　　１学年

フォトロゲイニング

ポスターセッション

キャリア教育講演会

２　取組の成果

(1) 英語教育の推進について

山形県と群馬県先進校視察を行った職員４人中３人が英語科教員である。特に山形県視察では、個人面談形式で定期テスト１週間前にパフォーマンステストを行うなどの新たな指導方法を学び、本校の他の英語科教員とも情報共有を行った。国公立大学や難関私立大学合格へ向けて、この方法をＧＴＥＣ指導に生かすヒント等を持ち帰った。また本校は海外修学旅行を実施しており、英語による村上紹介を行う等、海外修学旅行が、絶好のコミュニケーション能力を養う場となっている。

○　２年生生徒アンケートから

・(英語コミュニケーション能力向上プロジェクトに参加して) プレゼンテーションの分量が多くなくても伝えたいところをゆっくりはっきり話すことが大切だと分かった。実際に体験すると、アイコンタクトは自然にとれていたので良かった。

・(修学旅行先シンガポールで) 実際に会話してみることが英語力の向上につながるのではないかと感じた。

(2) 進路実現に向けた本校独自の教育課程編成について

本校は既に一部授業で習熟度別クラス編成を導入しているが、特進クラス導入までには至っていない。群馬県のカリキュラム・マネジメント推進校から全ての教科で共同学習を導入している旨の報告があった。本校でも共同学習や教科横断型授業を取り入れている場面もあるが、今後、積極的に「主体的・対話的で深い学び」の研究を推進し、校内委員会で議論を重ね新学習指導要領に対応した教育課程の編成に生かしていきたい。

(3) 地域探究学習の推進について

今年度は行事の順番を見直し、７月末に実施する事業所訪問の２週間前に事業所長等を招き、タイムラグなく、事業所訪問を実施するよう、生徒の行事に参加するモチベーションを維持すよう日程を組み替え実施した。また市議会議員との懇談、大学講義体験等、本格的に受験生になる前の１年生段階での設定等にも配慮した。

○　１年生生徒アンケートから

・(ポスターセッションについて) 想像力が身についた。発表を控え、どのように進むか、どのような質疑が出るかなど、様々なことを想像して活動に取り組んだ。

・(村上学をするにあたり) 私は、以前は周りを見ずに一人で動くことが多く協調性がありませんでした。しかし、高校に入り周りを見て行動することで、実際に困っている人や、いつもと様子が違う人を見つけ出し、動けるようになった。

・以前から思っていた企業へのイメージが変わるところもあった。

３　総合所見

・　今年度はイヨボヤプランの「見える化」を象徴している巨大ポスターを生徒玄関前に設置した。またイヨボヤプランの概念を盛り込んだ学校紹介ＤＶＤを中学校説明会等で活用した。

・　様々な課題に対応するため、村高イヨボヤプラン委員会と各学年が一層の校内連携を図りつつ、より一層組織の活性化を図っていきたい。

・　今年度の数値目標と成果

項　目	目　標	成　果
国公立大難関校及び難関私立大学	複数名合格	難関私立大学達成 （早稲田大学、東京理科大学等）
センター試験国公立型出願率	30%	32.1%
国公立大進学率	16%	12.3%
ＧＴＥＣ平均３うちグレード４以上	30%	52.0%
部活動加入率	92%	84.4%
学校満足度（１，２学年）	86%	80.4%
学校満足度（３学年）	92%	78.3%

・　カリキュラム・マネジメントについては、各教科の年間指導計画を一覧表にし、教科横断型の授業実践を推進するなど、学校全体で取り組むとともに、主体的・対話的で深い学びの実践を図るため、定期的に「アクティブ・ラーニング（主体的・対話的で深い学び）週間」を設定し、お互いの授業を参観することで授業改善を図った。今後もこの活動に取り組んでいくとと

もに、少人数学級での習熟度別クラスや、主要３教科における展開数を増やした授業など、特進クラスの導入を含めて一層の検討を進め、村高イヨボヤプラン委員会を中核に実効性ある教育課程の編成を推進していきたい。

- このほか、英語力向上を目標に掲げ海外修学旅行の実施及びそのためのプレゼンテーションテストの実施、スマートフォンを使用したコミュニケーションの取り方にも取り組んだ。今後は外部試験の受験等、英語力向上を図る機運醸成とその機会を提供したい。
- 海外修学旅行（シンガポール）では現地大学生との交流会を実施し全ての生徒が英語でコミュニケーションを図る等、実践的な学習を積むことができた。生徒は英語でコミュニケーションを取ることが世界では必然であることを認識したようである。

４　今後の取組

本校の令和２年３月卒業生には難関大学に合格した者もいる。本校は令和２年 10 月に創立 120 周年を迎える。村上高校の文武両道を目指す上昇機運はますます高まっている。

令和２年度の実施項目（予定）

- プレゼンテーション力を磨くための講演会
- 英語力向上研修
- 英語指導先進高校への学校訪問
- ３学年学習合宿の実施
- ３か年を通した、村高ゼミのブラッシュアップ
- 新学習指導要領に対応した教育課程の研究
- 英語圏への修学旅行での交流会を活用した英語によるプレゼンテーショントレーニング
- 教育フォーラムでの成果発表と報告書の作成
- 地域の企業と連携した地域課題解決のための探究学習
- 地域社会を知るためのキャリア教育講演会
- カリキュラム・マネジメントを活用した授業改善に向けた教員向け研修会

修学旅行（シンガポール）

（様式１）　　阿賀高　第 153 号

令和２年３月 16 日

高等学校教育課長　様

学番　３１　県立阿賀野高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

阿賀野高等学校

【テーマ】「地域企業等と連携したキャリア教育の推進」

【目標】

１　就職や進学への関心・意欲を高めるために、阿賀野市や地域の産業界、上級学校と連携しキャリア教育を拡充する。

２　学習意欲の向上や進路意識の高揚を図るために、「学校設定科目」を新設し、来年度実施に向けて、教育内容、評価等を具現化する。

３　「人間関係形成能力」を育むための学習プログラムの効果を検証し、より効果的な内容に発展させる。また、研修を計画的に実施し、教職員のスキルを高める。

【取組の概要】

１　キャリア教育の拡充

○　地元企業の見学（２学年）

○　インターンシップ５日間の実施及び成果発表会（２学年）

○　大学等の上級学校での講義（１学年）及び３年生からの講話（１、２学年）

２　教育課程の見直し

○　令和２年度から実施する教育課程について協議を進める。

○　キャリア教育に係る「学校設定科目」の内容、評価、関係機関との連携の在り方について協議を進める。

３「人間関係形成能力」を育むための学習プログラムの実践

○　大学と連携して、構成的グループエンカウンター（以下、ＳＧＥ）、ソーシャルスキルトレーニング（以下、ＳＳＴ）を実施して効果を検証し、主体的な進路選択ができるような取組につなげる。

【取組の成果】

・　インターンシップは２年生全員が参加した。また、企業見学では95％以上の生徒が「高校生活や進路を考える際の参考になった」と回答した。

・　これまでのキャリア教育の実践内容を学校設定科目に取り込むこととし、地域産業に関する基礎知識の学びと組み合わせながら効果的な学習計画を立てることができた。

・　ＳＧＥとＳＳＴについては、人間関係形成能力に関する向上が７割以上の生徒で見られた また、職員研修においては参加者のほぼ全員が、「理解が深まった」などと回答した。

31【明日の新潟】実施報告(阿賀野高校)

【取組の内容】

(1) 地域理解のための企業見学（２学年）

６月26日(水)午後実施。阿賀野市内の企業（小菅建設興業、環翠楼）を見学することにより、地域産業の理解を深めるとともに、インターンシップに向けた心構えを身につけさせることをねらいとした。

(2) インターンシップ実施（２学年）

７月29日（月）から８月９日(金)の間の５日間程度実施。２年生全員が参加し、18の事業所において、職業観、就業観の醸成を図ることを目的として行われた。

なお、７月５日(金)１限、インターンシップの事前指導としてアドバンスパートナー株式会社渡邊康司様を講師としてお呼びし、マナーの必要性や意義について体験をとおして理解させた。

＜インターンシップ先＞

（株）カワトー、（株）キッド、（株）タカラ自動車、（株）長生館、
（有）環翠楼、阿賀コンクリート工業（株）、イオカ電子（株）、
（株）クボ製作所、（株）めんつう、（株）帆苅組、（有）安田興和商事、
阿賀野市役所、たちばなこども園、おとぎのくにこども園、
デイサービスセンター第２わかばの里、北蒲みなみ農業協同組合、
ウオロク岡山店、贈り物専門店しこーえん

(3) 上級学校訪問（１学年）

６月26日（水）新潟国際情報大学、にいがた食育・保育専門学校えぷろんを訪問し、講義の聴講、施設設備の見学などをとおして、進路選択について考える機会にするとともに、学習に対する意識の向上を図った。

(4) 構成的グループエンカウンター（ＳＧＥ）、ソーシャルスキル・トレーニング（ＳＳＴ）の実施（１学年）

新潟大学教職員大学院吉澤克彦教授と連携して、「人間関係形成能力」を育むための教育プログラムを研究した。なお、令和２年度からは総合的な探究の時間で扱うこととし、学校設定科目「自分デザイン」の授業と連携した取組に位置づける計画としている。

＜内容と日時＞

４月 24 日（水）　６限　自己紹介、自分の好みをとおした人間関係づくり
５月 22 日（水）　６限　喜怒哀楽をとおした人間関係づくり
９月 25 日（水）　６限　キャリア教育「どんな仕事が合っているのか」
11 月６日（水）　６限　自分に宛てて書く手紙
12 月４日（水）　６限　関わりのスキル・配慮のスキル
※　２月 25 日(火)13:30～15:00 に、吉澤教授を講師とした職員研修を実施

【取組の成果】

(1) 地域理解のための企業見学について（２学年）

- 90%以上の生徒が、「地域産業の理解が深まった」など肯定的な感想をもつことができた。
- 生徒からは「自分にあっている仕事について今後も考えていきたい」、「ドローンなどの最新機器が導入されていて、様々な知識が重要だと感じた」などの感想があった。
- 今後はこれらの取組を１年生の学校設定科目「自分デザイン（１単位）」で扱う計画としている。

(2) インターンシップ実施について（２学年）

・　インターンシップに全員が参加した。（昨年度参加率 90.0%）

・　「インターンシップをとおして学んだことは何か」というアンケート結果の昨年度比較は以下のとおりである。このことから、インターンシップがより充実するよう、取組内容について検討を重ねる必要がある。

今回のインターンシップで学んだことは何ですか。（複数回答可）

	昨年度	今年度	差
①働くことの楽しさ	44.2%	33.3%	-10.9%
②働くことの厳しさ	48.1%	40.5%	-7.6%
③仕事に関する勉強の必要性	26.9%	14.3%	-12.6%
④体力の必要性	50.0%	40.5%	-9.5%
⑤挨拶／言葉遣いの大切さ	71.2%	57.1%	-14.0%
⑥時間を守ることの大切さ	30.8%	33.3%	2.5%
⑦人間関係の重要性	42.3%	31.0%	-11.3%
⑧学校と社会の違い	38.5%	45.2%	6.7%
⑨社会における企業の役割	17.3%	7.1%	-10.2%

・　実施後の企業の担当者に対するアンケートでは、学校での日常的な指導として「挨拶の指導を強化すべき」と回答した割合が 46.2%、「応対の指導を強化すべき」と回答した割合が 42.3%となった。事前指導とあわせ、日常的な場面での指導が必要な内容として教員に周知を図るとともに改善策を検討する必要がある。

・　今後はこれらの取組を２年生の学校設定科目「未来デザイン（１単位）」で扱う予定としている。

(3) 上級学校訪問（１学年）について

・　「高校生活や進路を考える際の参考になった」と回答した生徒は 98.1%

・　生徒からは、「今まで通ってきた学校との違いにびっくりした」「自分はまだ進路が決まっていないが、とても参考になった」などの感想があった。

・　今後はこれらの取組を１年生の学校設定科目「自分デザイン（１単位）」で扱う予定としている。

(4) 構成的グループエンカウンター（ＳＧＥ）、ソーシャルスキル・トレーニング（ＳＳＴ）の実施（１学年）について

・　抽出によるアンケートの結果、人間関係形成能力に関する向上が７割以上の生徒で見られた。

・　職員研修の事後アンケートでは、全員がこれらの取組を肯定的に捉えており、「生徒の成長に欠かせない取組である」「グループで話し合ったり、内容をシェアしたりすることの大切さを感じた」などの感想があった。

・　次年度からは「総合的な探究の時間」で扱う予定としており、学校設定科目「自分デザイン」との連携を踏まえ、キャリア教育や自分の将来について考える内容を新たに取り入れたが、自分の将来がテーマになった回はグループワークが進まない状況となった。

・　自分の将来をしっかり考えるための基礎となる知識を踏まえたうえで、上記のグループワ

ークを進めるよう、総合的な探究の時間と「自分デザイン」の授業計画についての調整をする必要があることがわかった。このことから、グループワークの前に地域産業の学習を充実させるような計画とした。

【総合所見】

・　上記のとおり、本事業の取組をとおして、地域と連携した「総合選択制の高校」としての取組を具体化することができた。

・　インターンシップや、地域からの講演会の実施においては、地域の方から積極的な協力をいただいた。今後も学校設定科目における地域産業を学ぶ場面等でも協力していただけるとのことであったので、授業内容に計画的に組み込んでいくこととした。

・　以下のアンケート結果から、インターンシップなどの体験的な学びをとおして職業観が身につき、生徒に主体的な進路選択を促すことができたと考えられる。今後の教育内容にも体験的な学びを積極的に取り入れていきたい。

令和元年度　インターンシップ実施後アンケート（生徒用）の集計結果

1　インターンシップに行く前の心境について、１つに○をつけてください

①　楽しみにしていた	②不安で緊張していた	③行きたくなかった	計
9	２６	7	４２

2　インターンシップを体験してどう感じましたか。1つに○をつけてください

①　楽しかった	②　充実感を味わった	③　つまらなかった	計
１９	２１	2	４２

3　インターンシップの仕事を理解できましたか。1つに○をつけてください。

①　よく理解できた	②　少し理解できた	③よく理解できなかった	計
２６	１６	0	４２

4　インターンシップは、進路を考えていく上で参考になりましたか。1つに○をつけてください。

①たいへん参考になった	②ある程度参考になった	③参考にならなかった	計
２３	１７	2	４２

5　実習時間について、１つに○をつけてください

①　丁度よかった	②　長い方がよい	③　短い方がよい	計
２９	0	１３	４２

【今後の取組】

(1) 企業見学、上級学校見学について

・　参加した生徒からは、大学の規模の大きさに驚いたという感想も多かったことから、実際に大学に行くということは意義があったと考えられる。

・　今後は、継続実施に向けた方法を模索するとともに、大学に進学した卒業生から、大学生活についてパワーポイントを使いながら話してもらう場面を設定する方向に切り替えることなどを含め、今後のあり方についての検討をする。

(2) インターンシップについて

・　今年度のインターンシップの反省を踏まえ、事前指導について再検討を行う。具体的には、これまで外部講師によるマナー講座や企業見学を実施してきたが、これらのインターンシップの取組への効果を検証するとともに、事前指導における地域人材の活用や地域産業について事前に理解することで、目的を明確化する取組についても検討する。

・　阿賀野市経営者同友会とも、今回の分析を共有し、インターンシップ先への働きかけについて検討を行う。

(3) ＳＧＥ，ＳＳＴについて

・　今年度の校内研修は１回しか実施できなかったが、ＳＧＥやＳＳＴはどのようなものであるか、どのように活用するのかという先生方に対する理解は深まったと考えられる。

・　今後は、本事業終了後においても本校の教員がＳＧＥやＳＳＴを実施できるよう、校内研修をさらに充実させる。

【インターンシップ（阿賀野市役所、クボ製作所）】

【ＳＳＴの授業の様子】　【ＳＳＴ、ＳＧＥの職員研修の様子】

（様式１）　　正 徳 高 第145号

令和２年３月13日

高等学校教育課長　様

学番　３９　県立正徳館高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

正徳館高等学校

【テーマ】小規模の普通科高校における教育機会の創生による教育の充実
～地（地域）・学（学校）・官（官庁）連携による教育の質の向上～

【目標】

１学年　「よいた学」で、地域人材との交流を基本とした地域連携などによる体験活動を通じて、コミュニケーション能力等を養い、地域貢献の意欲を高める。

２学年　「長岡学」で、ＳＤＧｓの視点に基づき長岡地域について学習し、課題発見・解決能力を養う。インターンシップを通じてキャリア形成の意欲を高めるとともに、地域社会の一員としての自覚を深める。

３学年　高校卒業後の自己の在り方・生き方についての思索を深めるとともに、地域社会の一員として果たすべき役割を自覚する。

【取組の概要】

１学年　①「よいた学」（地域の散策及び歴史・文化の学習、地域商店街や歴史・文化のＰＲ）②保育・福祉実習　③「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」参加

２学年　①楽山苑ボランティアガイド　②長岡学（地域の課題解決型の探究学習）③インターンシップ　④キャリアプランニング学習（３年生や学生による講話）

３学年　①キャリアプランニング（進路探究学習）②正徳館フェスティバル準備（学年縦断型グループの統轄や企画・実行）③ライフプランニング（卒業後の生き方について探究）

【取組の成果】

学校設定教科「キャリアガイダンス」が今年度から全学年で実施されるようになり、３年間を通じて地域と協働した探究学習の体系化が進んだ。また、地域との協働による探究学習を実施し、文化祭などの学校行事において地域連携を深めたことで、学校と地域との結びつきが強まり、生徒たちが地域の人材と交流する機会が増加した。

地域との協働による探究学習の体系化と地域人材との交流機会の増加により、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、協調性などの資質・能力が高まったと感じる生徒が多くいたことが今年度の取組の成果である。

1　取組の内容

今年度は、学校設定教科「キャリアガイダンス」の内容を充実させ、本校独自の地域と協働した探究学習の枠組作りに取り組んでいる。

また、社会に開かれた学校づくりの一環として、地域住民とともに近隣の施設や神社の清掃活動を実施した。文化祭では、地域内外の店舗・団体を招致して「与板がっこうマルシェ」を開催し、学校行事を地域のイベントへと発展させる試みに取り組んだ。

以下、学校設定教科「キャリアガイダンス」における探究学習の取組について記述する。

地域貢献活動

文化祭でのマルシェ

(1)　１学年の取組

「キャリアガイダンスⅠ」において、「よいた学」や「保育・福祉実習」、「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」に取り組んだ。

ア　「よいた学」では、与板町商店街の店舗のＰＲポスター作成や、地域史や文化について学んでレポート作成を実施し、成果としてそれぞれ「高校生ＣＭコンテスト」、「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」に応募した。

イ　「保育・福祉実習」では、探究学習の要素を導入し今年度から進路希望などを考慮して同じ施設での実習を２回行い、１回目の実習の振り返りの後に２回目の実習を実施した。

また、２回目の実習の事前指導として、外部講師によるバルーンアートの講習を実施し、園児や利用者への披露する機会を設けた。１回目の実習での経験を活かすとともに、園児や利用者が喜ぶような活動を実施することで生徒の経験や自信が深まる取組へと発展させた。

ウ　ユニクロ主催の「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」では、難民の子どもたちに送る古着の回収活動を行った。グループ別に地域の幼保、小中学校に訪問して服の回収の呼びかけを行い、回収後は各団体に再び訪問して報告会を実施し、成果の発表を行った。

よいた学（商店街への取材）

福祉実習（事前指導）

保育実習（事前指導）

保育・福祉実習（実習風景）

「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」

(2) ２学年の取組

「キャリアガイダンスⅡ」において、「楽山苑ガイド」と「長岡学」に取り組んだ。

ア 「楽山苑ガイド」では、地域の歴史的建造物・庭園である楽山苑についてグループ別に学習し、「よいた楽山苑ライトアップ」の期間中に、生徒がガイド役を担当した。

イ 「長岡学」では、１グループ４～６名で編成し、観光や産業、人口減少、防災など７つのテーマに分かれて探究学習を行った。各テーマに関する基礎知識を学習した後、テーマ別で行政関係者・地域住民と対話する機会を設け、対話から興味を持ったことを中心に学習を進めた。また、地域住民との交流は学校内だけでなく、子ども食堂の主催者への取材や地域の河川清掃への参加など学校外の活動に発展する事例もあった。

特に、長岡の産業をテーマとしたグループは、外部講師と連携して与板地域の刃物文化をＰＲするために、かき氷の製造・販売の体験に取り組んだ。６月の「越後与板打刃物職人祭」にて、かき氷の販売体験と、７月にかき氷機を製造している与板管内の企業への訪問を実施し、与板の刃物文化について学んだ。さらに、８月の「ロボカップジャパンオープン 2019 ながおか」と 11 月の文化祭において、学校で栽培した農作物を使用したオリジナルのシロップを作成し、外部講師や飲食店の協力を得てかき氷販売に挑戦した。

上記の探究学習の成果発表を、１学期はクラス内、２学期は文化祭で中間報告会として実施した。報告会後には、活動の振り返りを行い、学習内容の深化に取り組んだ。また、12 月の修学旅行では、観光をテーマにインバウンド政策について学んだグループが、訪問先の留学生に対して長岡市の観光プランを英語で紹介した。２月には、１年間の活動のまとめとして、行政関係者や地域住民の方々を招いて成果発表会を開催した。成果発表会の出席者の方々からの意見などを踏まえて、次年度の学習に発展させていく計画である。

さらに、新潟大学創生学部の学生による出前授業を企画し、進路決定に至るまでの経緯や大学での学びや生活について授業を実施し、生徒の進路意識の啓発を図った。

楽山苑ガイド

地域住民との対話

かき氷の販売体験

英語での発表（修学旅行）

探究学習の成果発表会

学生による出前授業

(3) ３学年の取組

「キャリアガイダンスⅢ」が今年度から開講され、１学期は「キャリアプランニング」として進路探究に取り組んだ。２学期は、地域と連携した文化祭における企画・運営を３学年生徒全員が担当し、来場者が楽しめる地域のイベントとなるよう、計画の立案と準備・運営に取り組んだ。

また、11 月以降は「ライフプランニング」として、進路決定までの振り返りや卒業後の人生

について探究する学習を実施し、学習のまとめとして１、２学年に対して進路講演会を開催した。

２　取組の成果

(1)　目標の達成状況

本事業における令和元年度の自己評価計画（数値目標）と結果は下表の通りである。

このうち、就職内定率及び２学年の「高校生活」満足度については目標を達成した。特に、２学年の「高校生活」満足度は、昨年度の 63.6%から 15%上昇しており、満足度が高まっていることが分かる。一方で、一般選抜志願倍率、中途退学者、１学年の「高校生活」満足度、「入りたい学校」については目標の数値に到達できなかった。

自己評価計画	目標値	結果
一般選抜志願倍率	1.00 倍	0.47 倍
中途退学者	1.00%	3.37%
就職内定率	100%	100%
「学校生活に関する意識調査」における「高校生活」満足度	80%	１学年 47.6% ２学年 78.9%
「学校生活に関する意識調査」における「入りたい学校」	50%	１学年 14.3% ２学年 24.2%

(2)　アンケート結果

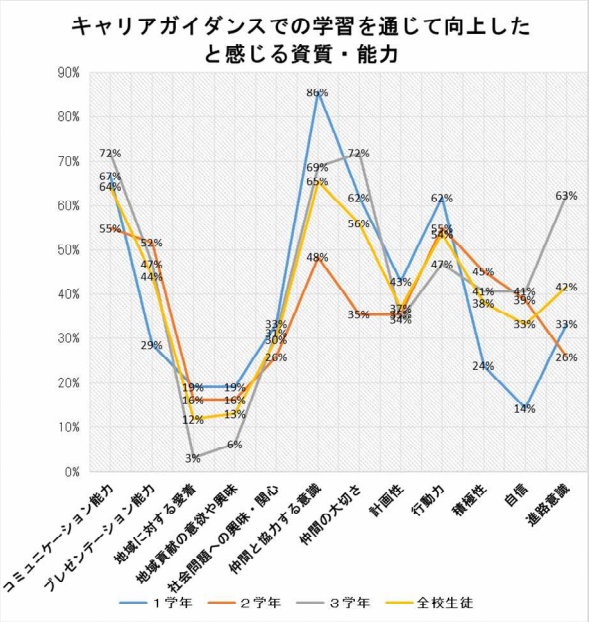
①　学校設定教科「キャリアガイダンス」について

ア　学習を通じて向上したと感じる資質・能力

生徒が「キャリアガイダンス」の授業を通じて向上したと感じる資質・能力は右のグラフの通りである。

「コミュニケーション能力」、「プレゼンテーション能力」、「仲間と協力する意識」、「仲間の大切さ」、「行動力」が向上したと感じる生徒が多数いた。

一方で、「地域に対する愛着」や「地域貢献の意欲や興味」「社会問題への興味・関心」が向上したと答える生徒は少なかった。３年間を通じて生徒のソーシャル・キャピタルの蓄積を図るための方策を考える必要がある。

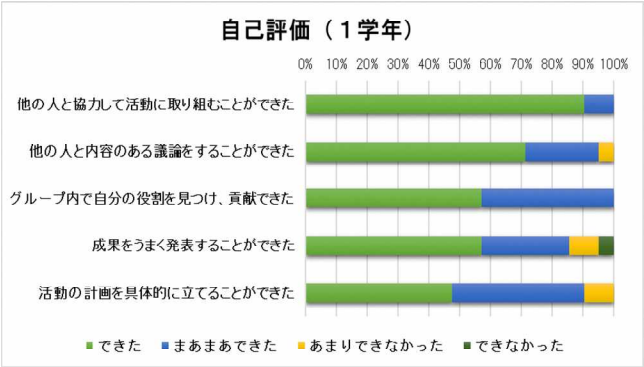


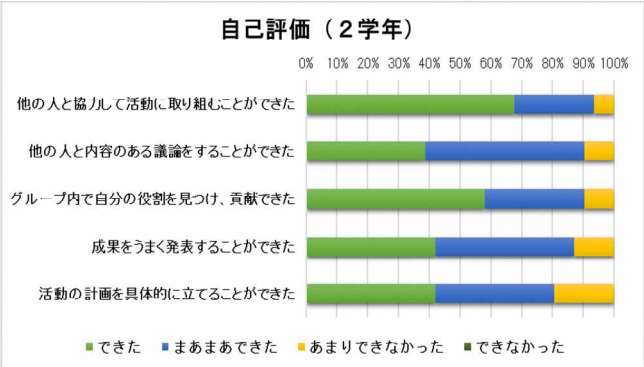
イ　自己評価

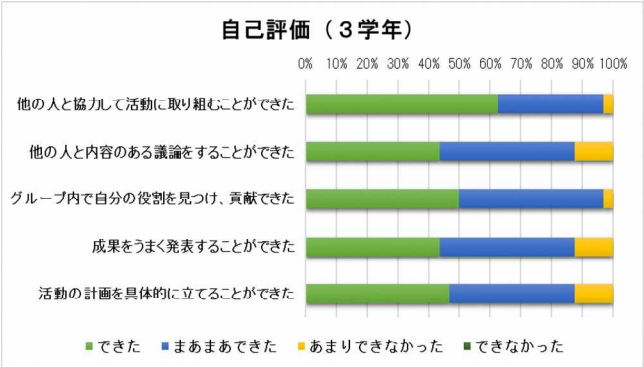
「キャリアガイダンス」における生徒の自己評価は、次ページ上部のグラフのとおりである。

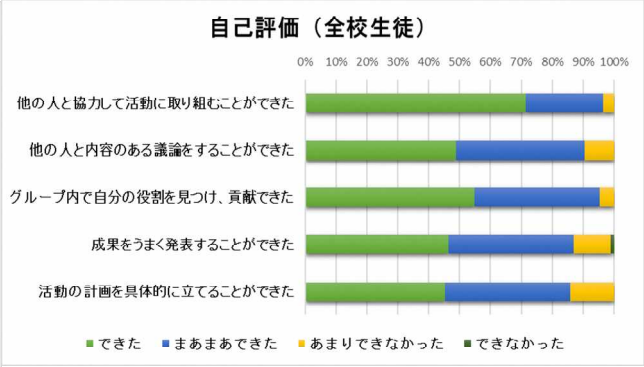
特に、グループ活動での協力や議論については、前項で「コミュニケーション能力」が向上したと答える生徒が多かったことが示しているとおり、積極的に行うことができたと考えられる。

成果の発表や計画性については、他の項目と比べ「あまりできなかった」と感じる生徒が多くいた。発表や計画立案の際に、適切な指導・助言ができるよう検討する必要がある。









ウ　生徒の主な感想

１年生	１年間の活動を終えて、たくさんの経験や知識が身に付きました。初めは与板のことを何も知らなかったのですが、授業をしていく中でどんどん関心を持ち、積極的に取り組めました。そして、（「“届けよう、服のチカラ”プロジェクト」では）世界中の困っている人たちへの手助けができ、その国の大変さがより深く理解できました。また、世界の問題のことをもっと知りたいと興味を持ちました。
２年生	１年間の活動で学んだことは、自分たちで考えることの楽しさです。地域の方から課題を聞いて、どうやったら解決できるのか考えるのは大変でした。ですが、「こんなことをしてみたい」とたくさんのアイデアを考えるのは楽しかったです。また、発表会に向けたスライドや原稿の作成は大変でしたが、達成感を得ることができました。さらに、インタビューを経験して、大人の方と話をするのがとても楽しいと思えました。

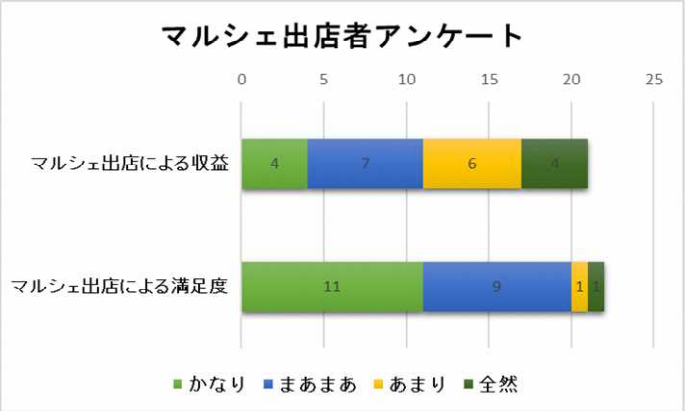
②　正徳館フェスティバルでの「与板がっこうマルシェ」について

本校の支援団体である「正徳館サポーターズクラブ」と協力して「与板がっこうマルシェ」を開催し、体育館の空きスペースなどに、合計 23 の店舗・団体に出店していただいた。食料品及び雑貨の販売やワークショップ、講演会を実施した。結果として例年を上回る約 500 人の地域の方に来場していただき、本校生徒と地域住民の方が交流する機会を創出することができた。

右のグラフは出店者のアンケート結果である。約半数の店舗が収益を上げることができ、ほとんどの出店者から満足しているとの回答が得られた。

小規模校における学校行事の維持・発展と、学校という公共空間を活用した地域の活性化という効果が期待できる企画であった。

また、費用が臨時営業許可の申請費だけであり、負担も少なく取り組みやすいことから、学校と地域の連携のアイデアとして次年度以降も開催を検討していきたい。



３　総合所見

本事業において、地域と連携した探究学習に取り組んだ結果として、「２　取組の成果」に記載のとおり、生徒のコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力が向上している。

これは、学校設定教科「キャリアガイダンス」の時間に、学校外の地域住民と関わる機会を多く作り出せたことが大きな要因である。「キャリアガイダンス」で意識していた取組として、地域住民と生徒が「対話する場」の創出があげられる。地域住民を講師として招聘し一方的に話をしてもらったとしても、生徒は双方向のコミュニケーションをとることはできないため、生徒のコミュニケーション能力の伸長にはつながらない。そこで、「キャリアガイダンス」の授業では、テーマ別に複数のグループを編成し、テーマに沿った地域住民や行政関係者との取材や対話の形式によるコミュニケーションの機会を作ることを意識した。

このような取組により、生徒が学校外の多様な価値観を持った大人と深く関わることが可能となり、生徒のコミュニケーション能力の伸長や積極性、行動力、自信を育むことができた。

また、学校や地域の関係の変容にも本事業は大いに貢献した。「キャリアガイダンス」をはじめ、地域貢献活動や学校行事などで、生徒及び教職員が地域住民と関わる機会を増えたことで、学校と地域の連携が昨年度と比べて深化した。例えば、環境について学習しているグループが、「与板町ほたるを守る会」の方に取材を実施したことを契機に、河川清掃ボランティアに誘われて参加するなど、地域住民との関わりからさらに深い体験的活動につながることがあった。

このように、本事業の指定を受けてからの２年間で、地域との協働による探究学習が着実に浸透し、さらに発展・深化した取組が可能になっている。

しかし、今後に向けた課題もあげられる。一つは、探究学習の評価についてである。「キャリアガイダンス」は学校設定教科であるため、評点による評価が必要である。平成 30 年度から評価規準としてルーブリックを作成し、評価の材料としてポートフォリオ（１枚ポートフォリオ含む）を導入しているものの、生徒がそれぞれ異なるテーマの探究学習に取り組んでいる中、公平な評価を行うのは難しく、教員間でも様々な意見が出ている。

また、地域との協働による探究学習の計画と準備が大きな負担であることも課題である。３年間の探究学習を体系化していくことが必要である。

４　今後の取組

本事業の最終年度となる令和２年度は､探究学習の指導計画及び評価方法の体系化を図りたい。

これまでの「キャリアガイダンス」では、以前から「総合的な学習の時間」や課外活動で取り組んでいたことを基に計画を立てていたが、授業内容が過多になっていることに加え、系統だった指導計画になっていなかった。そこで、３年間の「キャリアガイダンス」の指導計画を取捨選択・整理することで、探究学習の体系化を図りたい。また、評価方法に関しても同様に、ルーブリックの内容やポートフォリオの様式に改善を加えることで体系化を図りたい。

具体的な内容としては、学校外の地域人材の対話や交流の機会をさらに発展させるとともに、１年時の「よいた学」「保育・福祉実習」での学習内容を、２年時の「長岡学」「インターンシップ」につなげられるような内容へと発展させたい。また、３年時は１、２年時の探究学習のまとめとして、具体的な行動に挑戦し成果物を作り出す試みに取り組みたい。さらに、その過程で、協力してくれる地域人材を掘り起こし、学校と地域の協働による教育機会の創出に向けた方策について方向性を示したい。

また、本校の文化祭「正徳館フェスティバル」や地域貢献活動などの学校行事では、これまでの取組を継続することで、他校種や地域との連携をさらに深める方法を模索していきたい。

（様式１）　　栃 高 第　156 号

令和２年３月 10 日

高等学校教育課長　様

学番　４０　県立栃尾高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

栃尾高等学校

【テーマ】　地域とともに進める学校づくり
～地域に根付いたキャリア教育の実践と地域活性化プログラムの開発をめざして～

【目標】

1　組織的・計画的なキャリア教育の継続した実践をとおして、総合学科の特性を発揮した教育に取り組む。
2　地域の大学や企業、福祉施設、幼保、小・中学校、行政、住民等との連携・交流を推進する。
3　新たな問題の解決や探求活動に主体的、創造的に、協働して取り組む態度や能力を養う。

【取組の概要】

本校教育活動に、地域の大学、住民、産業、行政とその相互交流事業を加えるとともに、地域の自然、歴史及び文化等の再認識をすることで、郷土愛の一層の醸成を図る。
1　地域の人材を活用した取組や体験活動等を実施する。
2　世代間交流をとおした学校づくりのため、生徒と住民が集う地域コミュニティの場を維持・発展させる。
3　長岡大学と連携し、栃尾地域の活性化を目指すための情報収集・調査を行うとともに。企業や行政機関等と協力して商品開発、販売実習、観光資源の紹介および観光イベントに関するプログラム開発を行う。

【取組の成果】

評価項目	実際の取組例	評価方法	評価
1　地域に対する愛着と誇りの醸成	(1) 地域探訪学習会の実施 (2) 「栃尾てまり」伝承者による製作講習会の実施	・生徒アンケート、感想	3 3
2　地域に求められる学校へ	(3) 来て！見て！作って！体験フェスティバルの実施 (4) 栃尾高校の活動成果を展示する「とちおめぐり展」の実施	・来場者および生徒感想、職員の感想 ・来場者数の増加	3 3
3　開かれた教育課程等の構築	(5) 長岡大学と連携した地域活性化プログラムの開発	・本年度実践、生徒感想	3

「評価」　３：達成できた　２：概ね達成できた　１：達成できなかった

（内容については、別紙参照）

1　実際の取組例

(1) 地域探訪学習会の実施（ビデオ学習および栃尾織物を使った巨大壁画制作）

①　目　　的

地域の自然や歴史、文化等の再確認をとおした郷土愛の醸成を図る。

②　取組の概要

(ｱ) 実施日時　令和元年 10 月 4 日（金）　8:55～15:20

(ｲ) 実施場所　本校第１体育館および第２体育館

(ｳ) 対象生徒　全校生徒

③　取組の内容

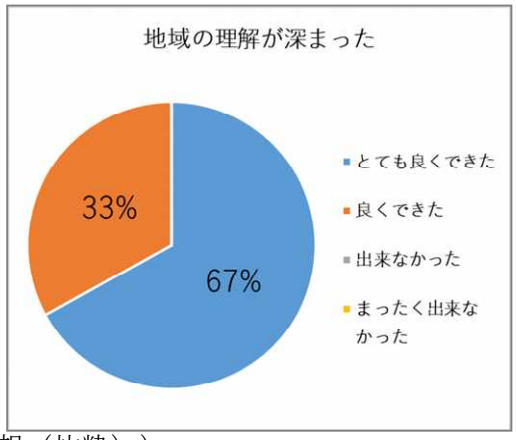
繊維産地の町である栃尾の産業を活かし、栃尾織物業組合様提供の布を絵の具の代わりに使用。各クラスごとに扉１枚程度の大きさの有孔ボードの穴に布をステッチすることにより壁画を描く。全校９クラス分を並べると栃尾の雁木通りを再現した巨大壁画が完成。さらに壁画制作と同時進行で、長岡市栃尾地域ふるさと創生基金事業実行委員会制作の栃尾地域紹介ビデオを鑑賞。ワークシートを使用し、栃尾の自然・歴史・文化・産業等を理解する学習会を実施した。

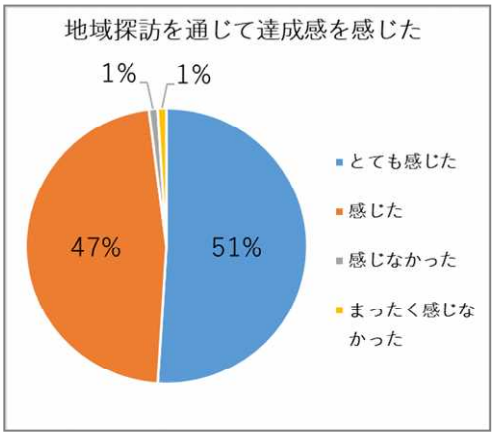
④　取組の成果

・橡峰祭にて展示

・栃尾高校「とちおめぐり展」にて展示

⑤　生徒アンケート結果





（生徒感想（抜粋））

・栃尾地名の由来はずっと気になっていたのですが、ビデオを見て驚きました。

・仕上がりがとてもきれいで、完成品を見た時にとても感動しました。

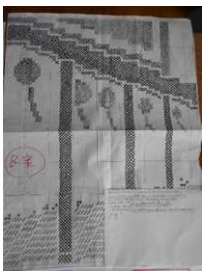
・仲間で協力して素晴らしい作品を作る事ができた。

・元々栃尾に住んでいたが、ビデオを見て、知らない祭りや行事があった。

・クラスの仲間と協力して一つの作品を作り上げて達成感があった。

・栃尾は田舎だと思っていたが。意外と栄えていたとわかった。

・一つだけではどんな作品かわからないが、すべてそろえると、立体感が出ていて素晴らしかった。



【生徒デザイン画】

【布作り】

【布をとおす】

【完成】

(2) 栃尾てまり伝承者による製作講習会の実施

① 目　　的

「栃尾てまり」製作を基礎から体験し、地域の伝統工芸に触れるとともに、「栃尾てまり」の魅力や栃尾地域に暮らしてきた先人の願いや思いを知り、理解を深める。

② 取組の概要

(ｱ) 実施日時　令和元年５月 27 日（月）、６月３日（月）、６月 10 日（月）、
６月 17 日（月）　計４回（８時間）

(ｲ) 実施場所　栃尾高等学校

(ｳ) 対象生徒　ファッション造形基礎②選択生徒（３年次生）

(ｴ) 講師先生　てまりの会会員

③ 取組の内容

第１回　手まりの土台作りを行った。芯に数珠玉を入れて音が鳴るような工夫を施し、糸を巻き付けて所定の大きさに仕上げていった。

第２回　写真見本から、作りたい柄と色糸を選び、製作を開始した。今回は、時間の関係で手まり図案は、桜の柄と菊の柄の２種類のみとした。

第３回　手まり上に刺していく位置を確認しながら、色糸で形と模様を作っていく。

第４回　仕上げの飾り紐をつくり、手まりに取り付ける。

④ 取組の成果（生徒感想（抜粋））

・最初は出来上がるかどうか不安だった。模様が複雑で難しかった。けれど作っていくうちに時間を忘れるくらい集中して取り組む事ができた。

・期間内に仕上がるか不安だったが、出来上がってよかった。自分でてまりを作る事ができるとは思っていなかった。良い経験になった。

・講師の先生が親切に教えてくれた。色合わせが難しかったが、作っているうちに集中して取り組んでいた。

(3) 来て！見て！作って！体験フェスティバル 2019

① 目　　的

栃尾高校の生徒による地域活性化

② 取組の概要

(ｱ) 実施日時：令和元年８月９日(金)　13：00～16：00

(ｲ) 実施場所：栃尾文化センター

③ 取組の内容

書道パフォーマンス・オリジナルキーホルダー・ミニ風車作り・マイ缶バッチ作り
ゴムでっぽうで景品ゲット・小切手でお買い物・シュシュ作り・おりがみでコマ作り
レジン押し花アクセサリー・トピアリー作り・栃高クイズ・ランタン作り
３Ｄプリンター体験・リコーダー演奏・サプライズブース（長岡造形大学生共同）

④ 取組の成果（来場者感想（抜粋））

・栃尾高校の生徒さんの対応がとても優しく親切で良いなあと思いました。どの生徒さんもイキイキと活動していて見ていて楽しかったです。ただ、数には限りがあるので仕方ありませんが、来たらもう終わりですと言われてがっかりしている子どもの姿も見られました。リコーダーの演奏がすごく良かったです。

・色々な体験ができて、小学生の子どもも大喜びしていました。もう少し誘導がわかりやすいと、どこに並べばいいか悩まずよかったかなあと思いました。高校生のみなさんお忙しい中準備ありがとうございます。
・子ども（２歳）も色を塗ったりして楽しめました。学生の方の親切な案内、おもてなしに感動です。ありがとうございました。
・シュシュ作りが楽しかった。スタンプラリーも良かった。
・小学１年と保育園の子ども達はとても楽しんでいました。３Ｄプリンターなど大人が見ても楽しめるものもあり、来て良かったです。
・高校生の皆さんがとてもやさしく親切で感激しました。夏休みのいい思い出になりました。親子で楽しませていただきました。ありがとうございました。
・丁寧に子どもに説明していただき子どもも楽しく作品を作る事ができました。とても楽しかったです。また来年もお願いします。

【ミニ風車づくり】

【シュシュづくり】

【小切手でお買い物】

(4) 栃尾高校の活動成果を展示する「とちおめぐり展」の実施

① 目　　的

地域に関する学習活動を長期間展示することにより、多くの方に栃尾高校および地域の産業等について理解を深めてもらう。

また、地域の施設で実施することにより施設利用者の増加や栃尾地域の魅力を広く伝えることができる。

② 取組の概要

(ｱ) 実施日時　令和元年 12 月 21 日（土）～令和２年１月 13 日（月・祝）

(ｲ) 実施場所　栃尾文化センター　１階展示室

③ 取組の内容

10 月に全校生徒で取り組んだ「栃尾織物による巨大壁画」をはじめとし、全国産業教育フェアで発表した織物製作＆被服製作に関する取組や「トチオノアカリ」という地域のイベントに美術・書道で出品した作品など 200 点以上を展示。

平成 28 年度から実施している栃尾高校展であるが、過去最高の 1,500 名を超える来場者があり、栃尾高校の取組はもちろんのこと、栃尾の産業やイベントについて発信することができた。

【壁画の展示】

【全国産業教育フェアの展示】

【トチオノアカリ作品展示】

(5) 長岡大学と連携した地域活性化プログラムの開発

① 目　　的

長岡大学と連携して、地域貢献を柱とした指導法や学習方法の点検を行うことにより、地域人材や地域資源を活用した地域活性化プログラム（学校設定科目等）を開発し、開かれた教育課程の構築を図るとともに、魅力ある学校設定科目等を設けることで在校生のやる気を引き出し、高校の活性化につなげ、中学生が入りたい、保護者が薦めたい高校にする。

② 取組の概要

(ｱ) 連携先　　長岡大学　経済経営学部教授　石川英樹　様
　　石川英樹ゼミナールⅢ　13 名（４人の中国人留学生を含む）

(ｲ) 対象生徒　　ビジネス基礎選択生徒（２年次生）

(ｳ) 協力企業等　Espoir オーナーシェフ　高林　様
　　デザイナー　大竹幸輔　様
　　栃尾文化センター　職員様
　　株式会社 JTB　様
　　カントリーフェスティバル（地域イベント）実行委員長　様

③ 取組の内容

今年度４月から、長岡大学のゼミナール生と本校ビジネス・情報系列の生徒が共同授業を本格的に開始。（プロジェクト名「FooT　Project」）

今年度は２つのグループに分かれ、２つの課題解決に向けて取り組んだ。（4/22～11/19 まで計 12 回の共同授業を実施）

(ｱ) Ｆプロ（商品開発プロジェクト）

地域特産品を活かした新商品の開発を目指して活動を実施。

９月 22 日（日）に実施された地域イベント「カントリーフェスティバル」での販売を目指し、栃尾名物「あぶらげ」を使った創作料理の開発を行った。

完成した開発商品であるラザニア「ラザーニャ・アル・フォルノ」はイベント当日及び、栃尾高校と長岡大学の学園祭でも販売を行った。

(ｲ) Ｔプロ（ＮＥＷツーリズム開発プロジェクト）

来年度の本格日帰りツアー実施を目指して活動を実施した。

９月 22 日（日）にツアー試行版を実施し、改善点等の検討を行った。

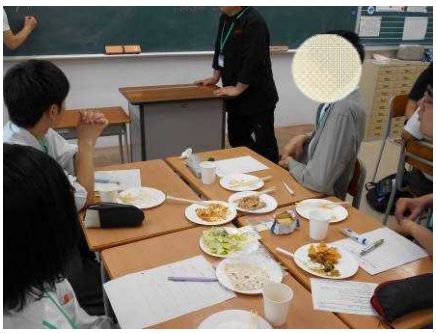
また、長岡大学のゼミナール生が取組の成果を発表する「令和元年度　学生による地域活性化プログラム成果発表会」に向けて、長岡大学に出向き意見交換会を実施。12 月７日にホテルニューオータニ長岡で行われた発表会を聴講した。

④ 取組の成果（生徒感想）

・ 高校生と大学生では、見ている目線が少し違うので、話し合いの中でも「そういう見方もあるのか。」と新たな発見が多くありました。地域の方に雁木通りの柱についてお話ししていただいた際には、大人ではなく、高校生などの学生が活躍しているんだなと思いました。

・ 世代が違う人と対話することで、新たな意見を聞くことができたり、目上の人との接し方を気にしたりできて、普段同い年の人と話す機会が多いので、新たなことを学べたので良かったです。

【ツアー候補地視察】



【開発商品試作】

【発表会の意見交換】

２　総合所見

本年度は、栃尾高校が実践してきた地域学習の３本柱である①地域探訪②来て！見て！作って！体験フェスティバル③栃尾高校展に加え、昨年度からスタートした長岡大学との高大連携の取組を、さまざまな地域の方のご支援のもと、本格的に実施することができたことが大きな成果である。これらの取組をとおして、生徒や学校、地域が次のように変わってきたと考える。

⑴ 生徒の地域に対する愛着や誇りを醸成し、自己肯定感を高めただけでなく、グループでの活動をとおしてコミュニケーションスキルが向上した

地域探訪におけるビデオ学習や栃尾織物で作る壁画制作に関しては、アンケートでも明らかなように、地域に対する愛着や誇りを醸成し、自己肯定感を育む活動であったといえる。また総合学科である本校は、ほとんどの授業が選択・少人数制に分かれており、日頃クラス全員で協力して作業に取り組む機会が少ない。しかし、クラス一丸となり壁画制作に取り組むことにより、日頃接する機会が少なかった生徒同士がコミュニケーションを図り、クラスが連帯感を高めグループ力向上につながったようである。

⑵ 幅広い世代と交流ができる地域での活動の機会が、栃尾高校ならではの魅力につながっている

長岡大学との共同授業では、大学生や地域で活躍する社会人の方々と課題解決について取り組み、幅広い年代の方と接する機会が増えた。また、長岡大学で実際の大学の講義に参加させていただいた。これらの取組は、高校卒業後の進路選択に大きな影響を与えている。例えば、上級学校への進学についての不安が軽減され、進学を目標にする生徒がでてきたことや、将来、地域活性化に取り組む仕事を目指す生徒がでてきていることなどである。長岡大学との共同授業に取り組む生徒はもちろん、保護者からは「他校ではできない取組ができる本校に入学して良かった」「もっと色々なことに取り組んでほしい。」という期待の声が多く寄せられている。

⑶ 地域における本校生徒への活動の期待

「来て！見て！作って！体験フェスティバル」は、地域内外から毎年多くの参加者が訪れ、リピーターも多い。このイベントは、「高校生にしか出来ないイベントである」と地域の方から期待され、次年度以降も長岡市から予算での支援をいただけることが決まった。また、今年度の「栃尾高校　とちおめぐり展」では、10 月に開催された全国産業教育フェアでの発表に関する展示や、トチオノアカリに出品した作品が大変好評であった。高校生が栃尾の産業や文化などに関して様々な視点からその魅力を発信してくれることに期待され、今後も活動を継続してほしいという要望が出ている。

３　今後の取組

来年度は事業の総括となるような取組を計画している。

⑴ 今年度の長岡大学との連携の取組をもとに、新たな学校設定科目「地域学習プログラム」の開発に取り組む長岡大学と連携した地域活性化プログラムの開発

今年度の高大連携は商業の系列を中心に取り組んできたが、その取組を来年度は商業・家庭・工業の３科に広げ、合同で新たな学校設定科目の開発に取り組みたい。

⑵ 地域を元気にする、キッズ向けイベント「来て！見て！作って！体験フェスティバル」の継承

イベントの実施にあたり、栃尾文化センターや長岡市の支援を受けており、来年度も同様に取組ができるように支援をいただく予定になっている。また、地域の期待も大きいことから、内容等については再度検討しながらより良い取組を継続実施していきたい。

⑶ 地域の特性を理解し、郷土愛を醸成する「地域探訪（地域学習）」の充実

来年度は地域学習の成果を確認する方法として、「地域かるたとり」を全校で実施する計画である。現在は実施に向けて、同窓生の方のご指導のもと、授業等において「地域かるた」の制作を開始している。

⑷ 地域学習の成果の発信「栃尾高校～とちおめぐり展」の継続

令和２年 12 月９日～令和３年１月 11 日の予定で計画している。

（様式１）　　吉高第　　186　　号
令和２年　３月 16 日

高等学校教育課長　様

学番　４６　　県立吉田高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

吉田高等学校

【テーマ】　　地域で貢献できる人材の育成

【目標】

１　地域に根ざした体験や学びを通して自尊感情を高め、能動的に学び続ける力を育成する。
２　人と協働する中で自分の役割を見つけ、自ら考えて行動することができる力を育成する。
３　吉田高校の教育活動を活性化させ、その内容を地域に情報発信する。

【取組の概要】

○　燕市教育委員会、燕商工会議所、吉田商工会をはじめとする吉田高校サポート協議会、燕市観光協会、社会福祉協議会等との連携により事業を行った。主な取組は以下のとおり。
・燕市長による特別講座（１年生対象）
・インターンシップ、事前指導としてのビジネスマナー講習会（２年生希望者対象）
・校外研修、地域進路探究講演会（１年生対象）
・地元企業経営者による模擬面接（３年生就職希望者）
・巣立ち教室（３年生対象）
・地場産業学習会（情報ビジネスコース２年生）
・ビジネスマナー講習会（情報ビジネスコース３年生、２回実施）
・赤ちゃん交流会、手話体験講座、地域の食と文化を学ぶ講座（文化教養コース２、３年生）
・先進校の視察（東京都立つばさ総合高等学校、船橋市立船橋高等学校）

【取組の成果】

１　平成 30 年度に立ち上がった吉田高校サポート協議会との連携により、地域の方からの協力がスムーズとなり、２年生対象のビジネスマナー講習会の新規実施、３年就職希望者の模擬面接が充実する等、取組が進んだ。
２　本事業の生徒の満足度が、前年度よりも 0.2 ポイント高まった。
３　先進校の視察により、商業と体育の学校設定科目に向けた情報収集をすることができ、自校の授業づくりの準備を進めることができた。

1　取組の内容と成果

主な取組の内容とともに、アンケート結果の評価「４：とてもよい　３：まあまあよい　２：あまりよくない　１：全くよくない」を付する。満足度はアンケート２つ目の質問項目の平均値とする。

(1) 燕市長による出前講座　【１年生：112 人】

期　日　　令和元年５月 23 日（木）

目　的　　「燕市まちづくり出前講座」をとおして、地域の課題とこれからを生きる若者に必要な力について学ぶ。

内　容　　「10 年後社会活躍できる”自分”になるために」の演題で、人口減少、社会環境の変化などを踏まえ、未来を切り拓くための力を学んだ。

講　師　　燕市長　鈴木　力　様

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
この取組について先生から初めて聞いたとき興味を持ちましたか	51%	38%	11%	0%
講座は積極的に聞くことができましたか	68%	30%	3%	0%
講師の方の内容は理解できましたか	70%	27%	3%	0%
地域の課題をとらえ、自分に必要な力を見つけましたか	59%	38%	3%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	62%	35%	3%	0%

生徒の感想　　満足度 3.7

「自分の発想や考えをもって生きていきたいと思った。」

「お話が分かりやすく、自分の住む地域の課題がわかった。」

「10 年後、人口減少やＡＩの発達により今とは変化した時代を見据え、自分で考えて生き抜く力が必要だと思った」

(2) インターンシップ事前指導のビジネスマナー講習会　【インターンシップ等参加者：20 人】

期　日　　令和元年７月 12 日（金）

目　的　　基本的なビジネスマナーを学び、働く上での心構えや人と協調していくために必要な能力を身に付ける。

内　容　　姿勢、挨拶、言葉遣い、相手への配慮等を実技をとおして学んだ。

講　師　　株式会社サマンサハート　代表取締役　高橋真由美　様

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
ビジネスマナーを教わることに興味はありましたか	56%	44%	0%	0%
ビジネスマナー講習会は満足できるものでしたか	94%	6%	0%	0%
講習会での実技は楽しく参加できましたか	75%	25%	0%	0%
企業に行くことへの興味・関心は高まりましたか	81%	19%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	100%	0%	0%	0%

生徒の感想　　満足度 3.9

「自分で考え行動することの大切さを知ることできた。」

「インターンシップだけでなく、社会に出たときに大人として身に付けておきたいことを教わることできた。」

「挨拶、表情、身だしなみが大切であると思った」

「今までマナーを知らずにいたために、悪かった点が見えた。インターンシップでは落ち着いて行動したい。」

(3) インターンシップ　【２年生：17 人】

期　日　　令和元年７月 29 日（月）～８月 23 日（金）のうち３日間

目　的　　地元企業等からの協力を受け、勤労観、職業観を養うとともに、生徒自身が自己の進路について考え、地元企業を知る機会とする。

内　容　　夏休みを利用し、製造・販売・接客・保育・美容・会計事務のうち、自ら希望する業種について３日間のインターンシップを経験した。

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
インターンシップについて話を聞いたときに興味を持ちましたか	62%	31%	7%	0%
自分から積極的にインターンシップに参加できましたか	54%	46%	0%	0%
インターンシップは楽しかったですか	85%	15%	0%	0%
地元企業について興味・関心は高まりましたか	62%	38%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	77%	23%	0%	0%

生徒の感想　　満足度 3.9

「職場の方から丁寧に教えていただき、楽しく仕事を学ぶことができた。」

「将来は販売の仕事に就きたいと思っていたので、貴重な経験になった。」

「私は２つの企業に参加して将来のことを考える機会になり、いい体験ができた。」

(4) 校外研修　【１年生：112 人】

期　日　　令和元年７月 26 日（金）

目　的　　現地をまわって地域の産業、文化、歴史を知り、地域の良さを再確認するとともに、将来の進路に生かす。

内　容　　燕市産業史料館と長岡大学、新潟国際情報大学を訪問し見学する。

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
史料館の見学について興味がありましたか	23%	53%	15%	9%
史料館での見学や講演は満足できるものでしたか	50%	40%	5%	5%
史料館での見学は楽しかったですか	48%	40%	8%	4%
地域の文化や歴史について興味・関心は高まりましたか	35%	48%	13%	4%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	45%	38%	15%	2%

生徒の感想　　満足度 3.4

「知らなかった歴史や理由などを知り、今までよりも金属加工に興味が高まった。」

「燕市の産業について知ることができてよかった。もっと歴史について詳しく知りたい。」

「地域の関心が高まり、地元の大学を目指し進路を具体的に考えようと思った。」

「史料館に約 5000 本のスプーンが飾られていて見応えがあり、本県のすごさがわかった。」

「１枚の銅板からやかんや鍋が出来上がっていく過程はとても興味深いと思った。」

(5) 地元企業経営者による模擬面接　【３年生：60 人】

期　日　　令和元年８月 30 日（金）～９月 11 日（水）の６日間

目　的　　就職を目指す３年生 60 名が､模擬面接により受け答えの内容や伝え方について指導を受け、より良いスキルを習得する。

内　容　　企業経営者と教員がペアで面接官役となり就職希望者の模擬面接を行う。生徒１人が２回、面接官を変えて模擬面接を受ける。足りない点を知りさらに練習を積む。

協力した地元企業等

社会福祉法人つばめ福祉会、社会福祉法人吉田福祉会
社会福祉法人桜井の里福祉会、株式会社サマンサハート
燕運送株式会社、藤田金属株式会社
株式会社ほしゆう、明道メタル株式会社
株式会社山本鉄工所、燕・弥彦総合事務組合
（以上、吉田高校サポート協議会から 10 団体延べ 35 人参加）

成　果

・一次応募での就職内定率　　80.0%　　（昨年　　75.8% ）
・全員が内定した時期　　12 月半ば　（昨年　11 月半ば）
・就職内定した地域　　三条・燕地区での就職内定者 88%　（昨年　94%）

(6) ビジネスマナー講習会　【情報ビジネスコース３年生：26 人】

期　日　　令和元年５月 22 日（水）・７月３日（水）の２回

目　的　　体験を交えた講義をとおして、具体的なビジネスマナーの基本を習得する。

内　容　　商業科の授業で１回２時間の講義を２回実施し、社会人として必要なチームワーク、コミュニケーション能力、挨拶、名刺交換についてゲームや実技をとおして学んだ。

講　師　　社会福祉法人つばめ福祉会　特別養護老人ﾎｰﾑ白ふじの里　園長　佐野一美　様

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
ビジネスマナーを教わることに興味がありましたか	35%	52%	13%	0%
ビジネスマナー講習会は満足できるものでしたか	39%	57%	4%	0%
講習会での実技は楽しかったですか	57%	43%	0%	0%
社会人になることへの心構えや関心が高まりましたか	48%	48%	4%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	48%	52%	0%	0%

生徒の感想　　満足度 3.4

「ゲームをしながらコミュニケーションの大切さを学ぶことできて楽しかった。」
「楽しく社会で必要なマナーや名刺交換を学ぶことができた。」
「ホウ（報告）・レン（連絡）・ソウ（相談）の大切さや人に正確に内容を伝えることの難しさを知った。」「電話の応対についても実技をとおして学んでみたい。」

(7) 地域進路探究講演会　【１年生：112 人】

期　日　　令和元年 10 月 16 日（水）

目　的　　地元企業の先輩から、仕事内容や休日の過ごし方等について情報を得て、進路を考え、高校時代に経験しておきたいことを知り、今後の高校生活に生かす。

内　容　　燕市内の企業の若手社員と１年生が対話形式で懇談を行い、仕事内容、休日の過ごし方、勤めてよかったこと、初任給の使い道、必要な資格等について情報を得た。

参加企業　公益社団法人つばめいと（コーディネート）、江部松商事株式会社、株式会社新越ワークス、明道メタル株式会社

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
地域進路探究講演会について興味がありましたか	32%	54%	8%	5%
講演会は満足できるものでしたか	57%	38%	0%	5%
講師の方の話は楽しかったですか	51%	41%	3%	5%
地域の企業について興味・関心が高まりましたか	65%	30%	0%	5%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	70%	24%	3%	3%

生徒の感想　　満足度 3.5

「仕事を調べるときは、仕事内容のほかに、企業の雰囲気にも注目して考えようと思った。」

「進路を決める上で役に立った。もっと他の企業についても調べたくなった。」

「社会人と学生の違いが大きいことが分かった。高校生活をしっかり過ごしていきたい。」

(8) 食と文化を学ぶ講座　【文化教養コース２年生：28 人】

期　日　　令和元年 12 月 18 日（水）

目　的　　地域で受け継がれてきた食文化に触れ、食と地域とのつながりについて学ぶ。

内　容　　調理実習「おこわだんご」

講　師　　農村地域生活アドバイザー　岩野幸子　様

アンケート結果	評価４	評価３	評価２	評価１
食と文化を学ぶ講座を聞いたとき興味をもちましたか	50%	50%	0%	0%
講座は満足できるものでしたか	73%	27%	0%	0%
自分に与えられた仕事（役割）はやり通しましたか	85%	15%	0%	0%
地域の食文化について興味・関心が高まりましたか	54%	46%	0%	0%
進路や将来を考える上で役に立つものでしたか	27%	69%	0%	4%

生徒の感想　　満足度 3.7

「初めて聞いた料理だったが、食べたらとてもおいしかった。家族にも食べてもらったら、とても喜んでくれた。」

「郷土料理を学び、地域のことを知るきっかけになった。」

「おこわの中にあんこが入る意外な組み合わせだったが、食べたらおいしく、簡単に作ることができたので家でも作ってみたい。」

「調理手順を区切って説明していただいたおかげで、楽しくできた。」

(8) 先進校視察　【教員：３人】

目　的　　総合選択科目に設置する商業の学校設定科目「地域ビジネス実習」「観光ビジネス」と体育の学校設定科目「総合スポーツⅠ」「総合スポーツⅡ」の研究として、授業内容や指導方法などを先進校の実践から学び、本校の授業づくりに生かす。

訪問者　　教諭３人（保健体育科２、商業科１）

視察先①　東京都立つばさ総合高等学校　　令和元年 11 月 25 日(月)　　３人

都内では４番目に広い敷地を有し、全天候型の 400ｍトラック、人工芝のテニスコート・３階建ての建物の３階にある開閉式屋根構造の屋内プールを完備している。総合学科であることから横断的にどの科目も選択できる。選択科目の履修条件や縛りが少なく、各科目の人数は、志望理由書を利用して調整している。

【商業】学校設定科目「観光」は、教養として時刻表の見方やホテル予約などの学習を取り入れている。

【体育】外部講師を定期的に依頼し、担当者がＴＴの形で授業を行っている。転勤等で担当者が変わり、専門が異なっても科目設定が可能である。

視察先②　千葉市立船橋高等学校　　令和元年 11 月 26 日（火）　３人

創立 60 年を終え、さらなる飛躍を目指している。従来のスポーツの強豪校のイメージだけにとどまらず、学力向上を目指し、２期制と単位制を導入し、部活動と学業との両立を図る取組をしている。

【商業】商品開発として、メーカーとのタイアップや、キャラクターのライセンス契約を結んでの販売実習・電子決済・YouTube などを活用した情報発信を行っている。

【体育】「スポーツ方法学」は、より専門的な競技種目の実践内容とし、運動部と連携した科目設定になっている。「スポーツ総合演習」は、学年ごとにⅠ・Ⅱ・Ⅲを付し、部活動と直結した授業内容となっている。また、両科目は授業日の後半に置き、その日の清掃等は事前に行って授業後すぐに部活動を始められるようにしている。

２　総合所見

上記で紹介できなかったが、生徒アンケートのうち満足度のみを取りあげると、赤ちゃん交流会 4.0、手話体験講座 3.7、巣立ち教室 3.6 であった。これらの事業のアンケート評価で、満足度を示す項目の平均値は「3.7」（昨年 3.5）となり、目標である 3.6 を達成できた。

令和２年３月卒業生のうち、就職内定した生徒の勤務地は、三条・燕地区が約 90％を占めている。本事業により１年生の時期から地元の方と接する機会が多くなり、地域を良さ知り、将来の姿をイメージしやすく、地域に貢献しようという意識が高まっている。

３　今後の取組

今年度は、日程の関係から予定していた事業のうち、グローバル教育体験講座と地域スポーツ体験講座が実施できなかったことから、次年度は早期に計画して実施する。また、学校設定科目の実施や、総合的な探究の時間の内容を充実させる点からも、本事業を活用し、地域に出て活動する内容を計画する予定である。

（様式１）　　塩商工第 204 号
令和２年３月 16 日

高等学校教育課長　様

学番　５７　県立塩沢商工高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

塩沢商工高等学校
【テーマ】　地域と連携した教育課程編成の研究
【目標】 地域のニーズを見据えた特色ある教育活動（教育課程）により、地域企業が求める人材育成を推進し、地域に根ざした人材の育成を図る。このため、地域と連携した教育課程編成の研究に取り組む **【取組の概要】** (1)　生徒の土木に関する仕事への理解を深めるための効果的な導入方法の研究 (2)　克雪・利雪の事例等による地域理解を深めるための研究 (3)　地中熱を利用した技術を指導するための研究活動 (4)　コミュニケーション能力の向上を図る指導方法の研究 (5)　生徒が地域の課題と解決策を考察するための効果的な指導方法の研究 (6)　地域と連携した教育活動充実のための研究 (7)　インターンシップ実施（２年生全員） **【取組の成果】** (1)　将来、地域産業を支え、活躍する人材を育成するための教育課程編成に向けた指導方法の研究に取り組むことで、地域の将来を担う人づくりに寄与する。 (2)　地元建設業協会と連携した取組を取り入れた教育課程の編成と、地中熱を利用した技術等に関する指導方法の研究を行うことで土木に関する仕事への生徒の意欲・関心を高め、土木業への就職者数増加の一助とする。 (3)　観光教育に関する内容を取り入れた教育課程編成を研究し、観光ビジネス分野へ有為な人材を輩出する。特に、インバウンドに対応できる人材育成を推進し、ビジネスマナーと英会話によるコミュニケーションができる人材を育成する。 (4)　上記教育活動の情報を地域へ発信することで、地域から信頼され、期待に応える魅力ある学校づくりを推進する。特に、中学校の教員及び生徒へ専門校の魅力と本校の特色ある取組を積極的にアピールし、本校に入学したい（させたい）人数を増加させる。

1　生徒の土木に関する仕事への理解を深めるための効果的な導入方法の研究について

令和元年 7 月に機械システム科１年生を対象に土木作業現場や作業に使用する建設機械を実際に見学･体感することで土木の重要性について理解を深めるとともに、土木系科目を選択するための動機付けとし、土木に関する有為な人材を地元へ輩出するための一助とすることを目的として、土木見学を行った。

図１　国道 289 号線工事（三条市）

【生徒の主な感想】

・橋梁の橋脚の建設作業を見て、山の中に大きな橋を架けるという非常に大きな労力とたくさんの人の力で作られているというスケールの大きさに驚かされました。土木建築の大変さや必要性を知ることができました。

・コンクリートの品質を確認するスランプ試験を体験して、その難しさがわかりました。実際に使うコンクリートの質が低下していた場合大きな事故や欠陥につながるのでとても重要な試験だと理解できました。

【成果と課題】

生徒は実際の土木作業現場を見学・体感できたことで、土木に関する仕事の重要性を理解し、関心を高めることができた。今年度は、今までの活動の成果により、はじめから土木を希望する生徒が多く、定員を超える希望があった。今後も土木分野に関する理解を高める活動を続けていく必要があると感じている。

図２ スランプ試験（三条市）

2　克雪・利雪の事例等による地域理解を深めるための研究

機械システム科２学年では、克雪・利雪に関する講話を公益財団法人　雪だるま財団の伊藤様から実施していただいた。講話では地域特有の豪雪地帯における雪の活用方法等を学び、克雪するのではなく、「雪」に付帯価値をつけ、活用する方法などを学んだ。次年度では、体験型の活動をする予定である。

図３　講話風景①

図４　講話風景②

【生徒の主な感想】

・厄介者だった雪を有効活用して、天然のエネルギー源として活用できることはすばらしいと思った。また、それが法律になったことで雪が新しいエネルギーとして認められたということに感動した。

・毎年除雪をしている雪が人の役に立っていることを知ることができた。雪室をつくり食品の鮮度を保てることや品質を保ったまま熟成ができることを知った。自分たちが食べているものにまで雪が関われることを知ることが出来て良かった。

・厄介者だった雪を使って食品を保存するだけでなく、発酵・熟成するために雪を利用することで「宝物」としたのは本当にすごいと思った。まだまだ研究すればもっと他の利用価値を発見してさらに大切な宝物にできそうな可能性も感じられた。

【成果と課題】

雪に関する座学や実習等がないため、講話を通して克雪・利雪技術に関する興味・関心をもたせることができた。講話の内容を実習や教科に取り入れることが今後の課題と考えられる。

3　地中熱を利用した技術を指導するための研究活動

機械システム科３年生を対象とし、北越融雪株式会社様より、地中熱を使用した講演を実施していただいた。二酸化炭素排出量の内訳や地球温暖化といったことから、地中熱利用のメカニズム、保育園などへの施工事例を講演頂き、地中熱利用の必要性とその効果について学んだ。講演と並行して、新潟県地質調査業協会、株式会社興和様、北越融雪株式会社様から助言をいただきながら、校地内で地中熱を利用したヒートパイプによる融雪システムの施工を行った。施工内容としてはハンドオーガーを用いて直径 75㎜、深さ約 3.8m の穴を掘り、ヒートパイプを埋設するというものである。今年度は少雪のため、融雪状況を確認する機会はなかったが、地表と地中では下表のような温度の違いが見られた。温度差の大きな日では 15.6℃の差があり、生徒にとって、地中熱利用の可能性と実用性を大いに実感できる施工となった。

単位［℃］	1月6日	1月9日
気温	4.3	6.0
地表温度	-3.1	7.2
地中温度	12.5	13.1
温度差	**15.6**	**5.9**

表１　地表・地中温度差

図５　講話風景

図６　土留め施工

図７　掘削風景

図８　掘削距離確認

【生徒の感想】

・保育園に通っている小さな子ども達などを、新潟の厳しい寒さから守れるこのシステムは素晴らしいものだと思いました。
・なるべく温室効果ガスを出さないようにするため、地球のために気をつけて使っていこうとあらためて思いました。
・地中熱利用の施工方法について、今日学んだことを将来に活かしたいと思いました。

【成果と課題】

3.8m程度の深さでも、地表温度と地中温度に差が発生することを実際に体験できた。座学で学習した内容が、本当にそのような結果として確認することができ、非常に学習効果が高かったように思う。3.8mで温度変化は見られるものの、実際の融雪効果はどの程度あるのか確認できていないため、次年度以降の課題となる。

４　生徒に地域の課題と解決策を考察させるための効果的な指導方法の研究

令和２年２月に商業科２年生を対象に、「観光のちからで地域の課題を解決しよう！」と題して、講師に新潟経営大学の近藤政幸教授を講師に迎え開催した。

図９　講師紹介

① 地元の観光資源の発見、認識をする

塩沢の観光資源をチームごとに発見作業、観光資源カレンダーに記録記述使用するワークシート「観光資源カレンダー」

・コース別グループ分けにより、３チーム編成

・模造紙と４色付箋による資源の分類

（自然の宝、生活の知恵宝、歴史文化の宝、産業の宝）

図 10　ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ①

② 観光資源を使って地域の課題解決になることを学ぶ

塩沢の強み・優れているところ、弱み・困っているところをリスト化　（使用するワークシート「SWOT 分析表」）

・模造紙と２色付箋による強み、弱みのリストアップ

③ 塩沢の観光資源で解決できそうな体験・滞在メニューを記述する（使用するワークシート「SWOT 分析表」）

・縦（機会Ｏ・脅威Ｔ）と横（強みＳ・弱みW）を組み合わせるとどんなメニューが生まれるか

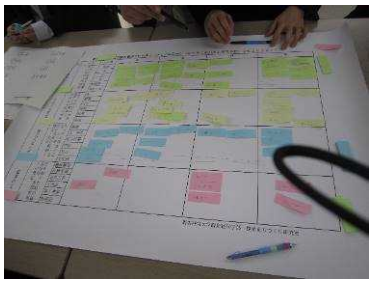


図 11　SWOT 分析ﾜｰｸｼｰﾄ

④ チーム発表

各チームの考察を全体で共有する

【成果と課題】

・「観光ビジネス」に取り組む上で地域理解は欠かせない要素であるということを学ぶことができた。

・演習では、生徒がＳＷＯＴ分析を行うのは初めてであったからか、最初は案がなかなか出てこなかったが、話し合いを重ねるうちに様々な考えを出すことができた。

・今後、ツアープランニングなどの旅行商品の企画立案を行う上で、ＳＷＯＴ分析の有効な活用方法の習得が課題である。

図 12　ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ②

【生徒の感想】

・地元について考える良い機会になった。意外と知らないことが多くて観光資源を見つけるのは大変だったけど楽しかった。

・講義はとても面白かった。地元の良い点や悪い点を再確認できた。この「宝探し」は今後も続けていこうと思いました。

・ＳＷＯＴ分析を通じて、世の中の状況と合わせて発信していく方法がたくさん見つかり、活性化が可能だと思いました。

５　地域と連携した教育活動充実のための研究

令和２年２月に商業科２年生を対象に、「雪国うおぬまＭＡＰ」によるＰＲ・情報発信の手法について、株式会社エフエム雪国の方にお越しいただき、講演と実習を行った。

図 13　FM 雪国　田村様

① 株式会社エフエム雪国とフリーペーパー『雪国うおぬＭＡＰ』についての説明

・『雪国うおぬＭＡＰ』って何？・作成に至った経緯　・作り方
・作成に必要な知識、技能　・広告料金　他

②　『雪国うおぬＭＡＰ』夏号で塩沢商工をＰＲしましょう！
　グループワークで７月下旬発行予定の『雪国うおぬＭＡＰ』夏号の「学校紹介ページ」枠（縦 14 ㎝×横 26 ㎝）で塩沢商工をＰＲするための文章を考えて、紙に書きだす。グループは５グループに編成して実施。

③　塩沢商工のＰＲする内容の発表（全グループ）

④　ラジオＣＭの原稿を作ろう。
　塩沢商工をＰＲする枠が『雪国うおぬＭＡＰ』夏号に掲載されていることを 20 秒のラジオＣＭで放送するための 100 字程度のＣＭ原稿を考える。

図 14　雪国うおぬ MAP

図 15　ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ発表

【成果と課題】

・フリーペーパーによるＰＲ・情報発信の手法について深く学ぶことができた。特に、科目「マーケティング」「広告と販売促進」で学習する内容について実学でどのように結びついているかを確認することができた講演であった。
・演習では、最初、生徒からの案がなかなか出てこなかったが、話し合いを重ねるうちに様々な考えを出すことができた。特に、各活動のなかでの発表は、日ごろの授業では目にすることができない生徒の一面を見ることができたと思える。
・マーケティングの授業の一環で、自校をどのようにすれば地元地域に広くＰＲ・情報発信することができるかを考えた。そこで生徒が考えたアイディアを形にするべく、今回は地域と連携した授業の取組として活用させていただいた。生徒も、自分たちが考えた内容が実際にフリペーパーに掲載されることを喜んでおり、夏号の発刊が非常に楽しみである。また、今回で終わりではなく、この内容を来年度以降の授業にも繋げていくことが課題である。

【生徒の主な感想】

・学校や仕事の良さをどれだけわかりやすく、面白く、決まった時間の中でＰＲ出来るかが、すごく大事だとわかりました。あまりこういう経験はないので、すごく良い経験になりました。
・自分たちで『雪国うおぬＭＡＰ』に載せる塩沢商工のことを考えて、改めて自分の学校の色々なことを考える良い機会になりました。自分たちで考えた商工の良いところが『雪国うおぬＭＡＰ』に掲載されると良いなと思います。

６　コミュニケーション能力の向上を図る指導方法の研究

令和２年３月４日に商業科１年生対象に、「ビジネスマナー講習」を実施予定であったが、コロナウイルスによる登校禁止により実施できなかった。

７　地元企業と連携したインターンシップの取組について

令和元年 10 月９日（水）～11 日（金）の３日間、地元企業を中心にインターンシップを実施した。今年度の対象生徒は２年生全員の 76 名で、うち不参加が１名（実施直前の怪我による）の 75 名、44 社で実施した。

図 16 商品陳列補助

【生徒の主な感想】

・日常生活で利用している店舗での実習でしたが、表に出ない仕事

や想像とは違った仕事がたくさんあり仕事の厳しさを実感した。実習では積極的に声を出すことを心がけて、指示を忘れないようにメモを取るなど工夫して作業できた。３日間という短い期間でしたが、実習先の方々にはお世話になりました。感謝いたします。

・返事や挨拶は３日間、意識してできたと思う。時間に余裕を持つことや、協力して作業することなど、日常でも必要なことが仕事でも重要であると学んだ。改修工事の現場を見学したり、ケーブル切断作業をさせていただいたりと貴重な体験ができた。自分の将来像や夢などをこの３日間をとおして改めて考えることができた。実習で学んだことを進路や将来のために活かしたい。

図 17　ｶﾌｪ食器洗い

図 18　重機操作中

図 19　機械操作説明

【成果と課題】

【成果】日常の指導ではなかなか身につかない、作業の先を読んで考えたり行動したりできるようになった。日々の学校生活で指導をされていることが、実際の職場でも必要であることを実感させられたことは、学校としても有意義な実習であったと考える。また、教員以外の大人から、挨拶の指導や言葉遣いの指導をしていただく機会がとても重要であると感じた。

【課題】各実習先からの評価では、特に実習初日に、挨拶の声が小さいことや、わからないことをそのままにして自分で判断をして行動してしまうこと、自ら質問ができないことなど、消極的な行動について指摘があった。学校生活では、挨拶の重要性などを指導しているが、実際に校外に出ると、不安や緊張が勝ってしまい、消極的になってしまった。次年度は、第一印象にもつながる挨拶、積極性に重点を置いて事前指導や日々の指導を行いたい。

８　総合所見

本校は、南魚沼地域を支える人材の育成が期待され、機械システム科においては、令和２年度入学生から、地域創造工学科に学科改編し、土木系コースの設置によって今まで以上に内容が充実する。また、商業科生徒においては、観光地南魚沼の発展に少しでも力になれればと願っている。そのためにも今まで以上に地域と連携した人材育成が必要である。今年度の事業は昨年度の活動をさらに積み上げることができた。こうした取組ができたのも、地域の企業・団体様のご協力と、本校生徒の育成のためにご尽力いただいた皆様方のおかげであり、深く感謝しております。

【地域の声を聞く会より】

・今年初めてインターンシップで生徒を受け入れました。挨拶もでき、はきはきとした態度はとても気持ちが良かったです。

・３年間で立派な大人になることは難しいけれど、それでも厳しい現実に目を向け、自分で生きていく覚悟を持てるような学びを、生徒に与えていただけるよう願っています。

・積極的に地元企業への就職を勧めてもらいたい。

・最近の若者は、コミュニケーション力が乏しい、ぜひ教育活動において、コミュニケーション力を身につけさせてほしい。

【学校自己評価】

・コロナウイルスによる登校禁止により生徒へのアンケートが実施できなかった。

（様式１）　　十 高　第３６８号

令和２年３月 16 日

高等学校教育課長　様

学番　５８　　県立十日町高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

十日町高等学校

【テーマ】　大学進学実績の向上と地域から信頼される学校づくりの推進

【目標】

○　進路情報を適切に提供し、進路実現に向けて必要な知識を身につけさせ、意欲の向上を図る。あわせて、学習合宿などを行い、正しい学習方法等を定着させ、効率的な取組の実践に結びつけさせる。これらの取組により大学進学実績を向上させる。

○　生徒の主体的な学びの成果や学校の取組などを積極的に地域に発信し、地域から信頼され、地域の中学生から選ばれる学校づくりを目指す。

【取組の概要】

(1) 大学進学実績を向上させるための取組

学習意欲の向上と正しい学習方法習得のため、大学進学を目指す生徒にむけ、各学年で学習合宿を実施した。

県外の進路指導等先進校の取組を視察し、本校の学習指導、進路指導に役立てる。

(2) 生徒の主体的な学びの成果を発信するための取組

本校を会場に「学習成果発表会兼高校生と中学生の情報交換会」を開催し、生徒会や部活動の取組を発表したほか、模擬授業を開催した。同じく、十日町市主催の「まちなか×GAKUENSAI」に部活動や生徒会執行部、有志らが参加し、多くの観覧者の前で活動の成果を発表した。

昨年に引き続き、近隣の中学校に向け、学校紹介ポスター（十日町高校 NEWS）を３回発行し、配布した。また、地域の小学生対象にサイエンスフェスティバルを開催し、小学生にも本校との関わる機会をつくった。

【取組の成果】

○　大学入試の結果では国公立大学の合格者数が 19 名（前期まで）と昨年度の 22 名と同レベルに達している。

○　公式 twitter のフォロワー数が 269 となり活動発信の１ツールとして定着した。

○　特色化選抜の倍率が 1.9 倍と大幅に増加、一般入試は昨年同様 1.0 倍を超えた。

1　取組の内容

(1) 大学進学実績向上に向けた取組

① ３年生学習合宿

目　的　受験に向けた長時間学習の基礎を身に付け、受験生としての学習習慣、学習方法の定着を図る。

日　時　令和元年７月 25 日～28 日（３泊４日）

場　所　南魚沼市、日本大学八海山セミナーハウス

対　象　３年生進学希望生徒

参加者　71 人

② １・２年生学習合宿

目　的　各教科の学習方法等を学び、学習習慣を定着させるきっかけを作る。教員による講義と自習時間を組み合わせながら、学習の定着を図る。

日　時　令和元年８月４日～６日（２泊３日）

場　所　南魚沼郡湯沢町、NASPA ニューオータニ

対　象　１、２年生大学進学希望生徒

参加者　45 人（１年 16、２年 29）

③ 県外視察

概　要　県外の進路指導および学習指導、探求活動、授業改善等、先進校の取組を視察し、本校における、キャリア教育や授業改善、アドバンストクラスの運営などを再検討し、学習指導、進路指導の実践に役立てる。

日　程　令和２年１月 28 日～29 日

視察校　○　石川県立野々市明倫高等学校

２年時ミニ課題研究、エクシードクラスの設定。

ＩＣＴ機器の活用と思考力重視の授業改善

○　石川県立金沢泉丘高等学校

石川県のトップ校で、ＳＳＨ、ＳＧＨ校。

全校で探究学習に取り組むなど探求的な授業改善を継続。

視察者　進路指導部より１名、キャリア教育推進委員より１名　計２名

(2) 生徒の主体的な学びの成果を発信するための取組

① 小学生のためのサイエンスフェスティバル

概　要　「サイエンス」をテーマにした体験ブースや、芸術の魅力に触れる企画を行う。理学部、生物部、吹奏楽部、教員等が参加

日　時　令和元年８月 20 日
場　所　本校
対　象　地域の小学生
参加者　136 人

②　学習成果発表会兼高校生と中学生の情報交換会

概　要　本校へ進学を希望する地域の中学生と、保護者を対象に、本校生徒の学習成果を発表するとともに、本校生徒が中学生に本校の様子や高校生活を伝える機会とする。生徒会執行部、空手道部、英語部、生物部、吹奏楽部らが参加した。

日　時　令和元年 11 月９日
場　所　本校
参加者　地域の中学生とその保護者約 30 人

③　まちなか×GAKUENSAI への参加

概　要　十日町市主催のイベント。「まちなか」から十日町を元気にしようと、段十ろう、十じろう、分じろうほか十日町市内の６施設で開催された。生徒会執行部、空手道部、理学部、書道部、吹奏楽部、美術部、写真部に加え有志団体ら 120 人以上が参加。地域の方々に成果を披露した。

日　時　令和元年 11 月 10 日
場　所　十日町市内６施設

④　学校紹介ポスター「十日町高校 NEWS」の発行

概　要　昨年度３回発行した「十日町高校 NEWS」を継続、４号～６号の３回発行した。

近隣の中学校約 30 校に配布し掲示を依頼。本校の進学状況や、学校行事、部活動、アドバンストクラスを取り上げ、中学生に本校の様子を紹介した。

第４号（令和元年６月発行）

特集「平成 30 年度の進路状況と部活動について」

平成 30 年度の進路実績（進学先、大学、専門学校、就職比率）

平成 30 年度の部活動結果報告（主に全国大会出場したもの）

卒業生からのメッセージ　など

第５号（令和元年 12 月発行）

特集「十日町高校の学校行事と部活動」

11 月までの行事を写真で紹介

北信越大会以上の部活動を紹介

第６号（令和２年３月発行）

「アドバンストクラスに注目！」

在籍生徒のアンケート結果や生徒からのメッセージを掲載

スキー部（クロスカントリー）のインターハイでの優勝やアルペンのインターハイ出場、生物部、書道部の大会結果について掲載

⑤　公式 twitter による情報発信

概　要　昨度半ばから本格運用を始めた公式 twitter を活用し、学校行事や、日々の活動、部活動の情報などを発信した。

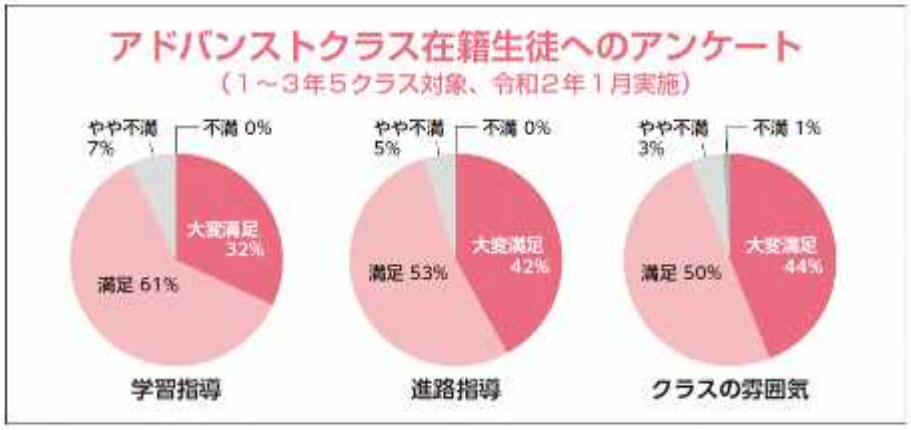
フォローワー数は 269

2　取組の成果

(1)　大学進学実績を向上させるための取組

令和２年度の国公立大学推薦入試の合格者が９人で昨年度８人を上回った。また前期試験の国公立大学合格者数は 10 人であり、合計で 19 人となった。数値目標では２年目は国公立合格者を 40 人、うち難関国立大学合格者５人としており、目標達成には至らなかった。

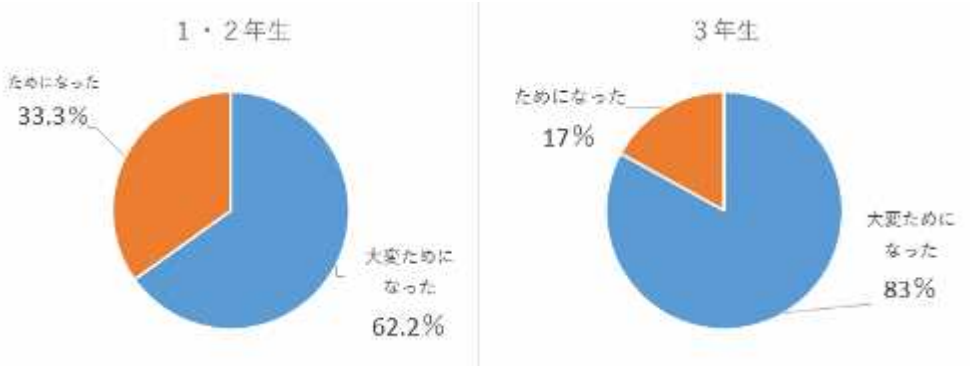
県外学校視察は、視察内容が職員会議で発表され、教職員に共有された。視察先の取組にならい、授業改善、進路実績の向上を目指す「授業公開週間の設定」が来年度から行われる予定である。また進学実績を向上させるため、アドバンストクラスの今後のあり方、進め方についても生徒アンケート（下）や、県外視察の内容を踏まえながら、次年度以降に検討をしていく。



３年、１・２年生学習合宿のアンケート結果は以下のようになり、大変ためになったという意見が多かった（次ページ）。

・１日 10 時間以上勉強することの大変さを知った。よい学習習慣を維持したい。（３年生）
・長い時間だったが友達が頑張っている姿を見たら自分も頑張れた。
・こんなに勉強したことがなく、やれて良かった。（２年生）
・合宿を通して勉強への意識や時間の取り方など、学ぶことがたくさんあった。
・とても充実した初めての経験だった。（１年生）

学習合宿に参加して自分のためになりましたか



(2) 生徒の主体的な学びの成果を発信するための取組

令和２年度の特色化選抜の志願倍率は 1.90 倍で、昨年の 0.9 倍から大幅に増加した。これらは本校各部活動の活躍と、活動内容が伝わった結果であると考えている。一般選抜の志願倍率は 1.03 倍と４年連続で 1.0 倍を超えたものの、数値目標の 1.10 倍には届かなかった。

３　総合所見

大学進学実績の向上に向けた取組では、国立大学合格数が昨年とほぼ同レベル結果がでた点で取組の効果があったと考える。一方で昨年度は東北大、筑波大など難関大学へ合格した生徒がいたが、残念ながら今年度はなかった。これらから、今年度は突出して成績が向上することはなかったが、全体的な成績の底上げや受験に対する意識の向上は図れたと考える。

生徒の主体的な学びの成果を発信する取組では、サイエンスキャンプに毎年参加している常連参加者もおり、地域と繋がるイベントを重ねてきた結果、少しずつ連携が深まっていると感じられた。学習成果発表会は内容的に大変好評であったが、参加人数が伸びなかった。次年度は告知の改善など行い、参加者数を増やし、発表の効果を上げる必要がある。

地域に向け学校の取組等について情報を発信する取組では、令和２年度のアドバンストクラス希望者数が昨年より 20 人程度増えており、本校の魅力を伝えることができていると考える。比較的発信が容易な twitter を通じた発信を続けるとともに、紙媒体のポスターも本校をアピールするのに効果があることが感じられた。

４　今後の取組

次年度も大学進学実績を向上させる取組と、生徒の主体的な学びの成果を発信するための取組の２本柱は維持し、さらに検討・修正を加え実績向上につなげたい。

進学実績の向上では、大学入学共通テストが始まることから、様々な情報を収集し、新しい入試へ対応する生徒向けの指導や、今年度開催できなかった保護者向けの講演会を開催していく。

主体的な学びの成果の発信では、これまで同様に発信を続けていく。また参加数が伸び悩んでいる学習成果発表会の形式や開催時期を再考し、より多くの人々に学習成果を披露し、地域から選ばれる学校づくりを目指す。

これまで実施した取組を学校行事として、今後も継続が図れるような体制をつくる。

(様式１)　　久比高第 151 号

令和２年３月 16 日

高等学校教育課長　様

学番７２　久比岐高等学校長　早川　勝志

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

久比岐高等学校
【テーマ】　生徒協働による「主体的・対話的で深い学び」を実現する学校をめざして

【目標】

１　学校設定教科「ステップアップ」の指導の充実

「ステップアップ」において、学習内容の確実な定着を図るための学び直し、検定試験の準備、進学試験の準備、就職試験の準備、社会人になるための準備を図る。

２　「主体的・対話的で深い学び」のための指導方法の改善

「主体的・対話的で深い学び」に向けた指導方法の改善のため、上越教育大学の西川純教授の指導を受け、『学び合い』による「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業の改善を図る。

３　ＩＣＴ教育の充実

ＩＣＴ教育の充実のため、教職員が電子黒板を使用しやすい環境にする。

【取組の概要】

①　学校設定科目「ステップアップ１」「ステップアップ２」の実践をとおして、久比岐高校に適した「学び直し」、「検定」受検のあり方を議論し、来年度行われる「ステップアップ３」で、久比岐高校に適したカリキュラムは何か、議論する。

②　「主体的・対話的で深い学び」に向けた指導改善のため、上越教育大学と連携して、１年生の「数学Ｉ」「数学A」に限らず、全ての教科で学び合いを取り入れた授業を実践する。

③　上越教育大学による『学び合い』の「出前授業」の実施、他校の『学び合い』授業の視察、研究会の参加を通して、『学び合い』授業の研究を重ね、取組に反映する。

④　校内授業公開週間を設定し、全職員がお互いの授業を見学し、授業改善に生かす。

⑤　「学び合い推進委員会ＮＥＷＳ」を発行し、『学び合い』の研究会、校内外の公開授業の情報を全職員に伝える。

⑥　学び合い推進委員を中心に、『学び合い』を含む協働学習による公開授業を行う。

【取組の成果】

①　「ステップアップ２」「ステップアップ３」に対しては教育課程委員会で１年間議論し、久比岐高校に適したカリキュラムを作ることができた。

②　『学び合い』についてのアンケートでは、生徒の 70%近くが授業は楽しいと回答し、85%近くが力がつくと回答した。主体的・対話的で深い学びにつながっていると考えられる。

③　公開授業の実施に向けて、他校や上越教育大学院生の『学び合い』授業の見学を合計６回行った。『学び合い』の研究会に２回参加した。『学び合い』の授業方法や『学び合い』における注意点、『学び合い』のためのクラスの作り方など大いに参考になった。

④　電子黒板２台を２教室に固定し、教職員が使用しやすくなった。演習科目で、常時、電子黒板を使用する科目もある。

【取組の内容】

1　学校設定教科「ステップアップ」の指導の充実

⑴ 学校設定科目「ステップアップ１」による、学び直しの取り組み

「主体的・対話的で深い学び」に取り組むための基礎となる学力を身に付けるため、「学び直し」に重点を置いて、全２単位のうち英語１単位は通常クラスで、国語と数学を合わせた内容のもの１単位は通常クラスを２展開して行った。昨年度アンケートの結果、生徒の80%以上が「授業内容が理解できた」と好評であった。今年度も同時期の２月に同様の結果を得て、好評であった。

⑵ 学校設定科目「ステップアップ２」の実践を通して、久比岐高校に適した検定のあり方の議論

「ステップアップ２」は全２単位のうち、言語内容１単位を通常クラスで、残り１単位は、通常クラスを２展開し、まず全員が論理言語力検定に向けた学力を身に付け、その後、選択で英語検定、数学検定、漢字検定のどれか１つに挑戦する内容であった。しかし、本校の生徒の実態から、英語検定３級以上、数学検定３級以上、漢字検定３級以上の挑戦は困難であったため、来年度からは論理言語力検定１本に絞り、全員受検させることにした。

⑶ 来年度行われる「ステップアップ３」の内容に係る議論

来年度から行われる「ステップアップ３」は、進路実現に向けたより実践的な内容として、生徒が教員の指導のもと、各自で課題を設定し、探究的に学ぶ機会を創出するようにした。上級学校への進学希望者に対しては進学試験対策、就職希望者に対しては就職試験対策を想定している。特に就職希望者に対しては新社会人向け講座を行う。その中でタイプライターのブラインドタッチを習得するための訓練を行うため、ＰＣ用タイピングソフトを購入した。

2　「主体的・対話的で深い学び」のための指導方法の改善

⑴ 『学び合い』を取り入れた授業の改善、校内授業公開週間の設定

昨年度同様、本年度も校内に「学び合い推進委員会」（校長、教頭、教諭５名）を設置した。この委員を中核として、校内で組織的に授業改善を推進した。

１年生の数学Ⅰ、数学Aにおいて、毎時間『学び合い』による授業を実施した。その他の教科・科目においても、演習の場面で『学び合い』を取り入れるなど、活発に試行が行われた。

⑵ 上越教育大学院生による『学び合い』出前授業の見学

昨年度は『学び合い』の授業形態を１年数学で実践していたが、今年度は拡大し、数学は２年数学Ⅱでも実践、他に１年政治経済、化学基礎、２年国語、英語、３年化学で実践した。

しかし、学び合い授業のイメージが明確でない教員もいること、授業規律が守られないなどの問題が指摘された。そこで、上越教育大学の西川研究室の支援を受け、大学院生による模擬授業を行い、本校職員が見学した。模擬授業の概要は下記のとおりである。それぞれ授業後、50分程度『学び合い』授業について研究協議会を行った。

① 令和元年９月10日（火）５、６限　古典A　15:40～研究協議会（職員参加者６名）

② 令和元年10月17日（木）５、６限　現代文B　15:40～研究協議会（職員参加者６名）

③ 令和元年12月16日（月）２限　生物基礎、３限　化学基礎　11:50～研究協議会（職員参加者３名）

⑶ 先進校への訪問と授業の参観

① 令和元年10月１日（火）　当校教諭２名（うち１名は学び合い推進委員）が、国際情報高校関谷　明典教諭の『学び合い』授業（地理）を見学した。『学び合い』形式の授業だが、生徒自身は

教科書・資料集・ＨＰサイトなどを見ながら、個人で解答していた。立ち歩くことはなく、隣の生徒と少し話し合う程度であった。静かな雰囲気で、『学び合い』というよりは、自学自習に近い授業であった。

② 令和元年 11 月 13 日（水） 当校校長および教諭（学び合い推進委員）の２名が、阿賀黎明高校 伊藤 美恵子教諭の「家庭基礎」における新聞活用学習の公開授業を見学した。協働学習の形態の１つを見学できた。

③ 令和２年１月 30 日（木） 当校教諭２名（うち１名は学び合い推進委員）が、五泉高校 梁取 大樹 教 諭の『学び合い』授業（数学）を見学した。授業は、プリントを用いた学び合いで、基本的には自分の席で取り組み、誰かに聞きに行く時は、何も持たずに聞きに行くというルールがあった。自分の課題が終わった生徒から、全員達成を目指して動き回る様子が見られた。全員達成の後、教員から解答時におけるミスのポイントについてヒントを与え、考えさせる場面があった。教えずにヒントのみの提示で、あくまでも生徒の「気づき」が起きるようにしていた。工夫の１つを学ぶことができた。

④ 令和２年２月４日（火） 当校教諭２名（２名ともに学び合い推進委員）が、有恒高校 末武 永教諭の『学び合い』授業（数学）を見学した。学び合いのルール（学び合いは何でもありではない、互いに気持ちの良い授業をする、できないものには個人的に指導する）が規定されていて、授業中、寝ている生徒は一人もいない。授業に関係ない話をしている生徒もいない。しかし、全員が課題を達成する方向に向かっている。節度ある『学び合い』授業が成立していると感じた。

(4) 校外研究会の参加

① 11 月 30 日（土） 第 11 回越後『学び合い』の会 当校校長、教諭１名参加

全体会では、終身雇用が難しい時代になってくる未来では、知識を注入されて学ぶのではなく、状況（環境）の中で参加して経験して学ぶ。Teaching → Learning への授業観の転換が必要だと具体的な例を挙げて述べていた。『学び合い』の重要性を感じた。

分科会で大阪の私立中学校の英語の先生の発表があった。ほとんど生徒に任せた『学び合い』の授業を行い、生徒と一緒に楽しんでいる授業風景をビデオで見ることができた。

② １月 12 日（日）～13 日（月） 第 18 回学びの共同体研究大会 当校教頭１名参加

西川研究室の『学び合い』とは別の研究団体の学び合いである。常に３～４人のグループで学び合いをさせ、全グループの課題達成を求める、強い規律のもとでの学び合い学習である。

数学では教員は常に机間巡視しており、共有課題に全員達成が困難なグループが多いとみるや、それまでグループ内で教えてもらっていた生徒の答案を書画カメラで投影し、その生徒に説明させた。その後、円滑に全グループが達成した。当校における『学び合い』と比較してみると、

・教員の役割はとても大きく、グループ学習を成功させるのは教員しだい
・生徒の学習活動の制限は大きくなり、勝手は許されない（規律が高くなる）
・３～４名のグループであるため「１人も見捨てない」に有利
・人間関係について、生徒が「形式上のつきあい」ができるかどうかの影響が大きい
・共有課題、ジャンプ課題の２段構えによって「終わったから自由」はない

特に、当校では生徒が１人になる場面を見かけることがあるが、ＤＶＤ視聴した授業ではそれがなく、少人数のグループ学習は学びへの参加に有利であると考えた。とても参考になった。

(5) 校内授業公開週間の設定

来年度に職員全体が『学び合い』を含む協働学習による公開授業をできることが目標である。そのため、教職員がお互いの授業を見学して授業改善ができるよう、校内授業公開週間を設定した。今年度２学期から、

学期に１回、２週間程度で設定した。

⑹ 「学び合い推進委員会ＮＥＷＳ」の発行

『学び合い』を含む協働学習の公開授業、上越教育大学院生による出前授業、研究会の情報を教職員に周知するため、「学び合い推進委員会ＮＥＷＳ」を９月から不定期で５回発行した。

⑺ 学び合い推進委員による公開授業

令和２年１月 16 日（木）５、６限に、学び合い推進委員を中心に本校６名の教職員が公開授業を行い、７限に研究協議会を行った。校外から 18 名、校内から８名の参加があった。

公開授業実施科目は、現代文Ｂ（担当　佐藤）、政治経済（担当　大貫）、数学Ⅰ（担当　松田）、化学基礎（担当、杉山）、化学（担当　鈴木）、英語表現Ⅱ（担当　田邉）である。

以下、研究協議会での質疑応答を略記する。

質疑応答

質問：授業での評価は誰がどのような方法で行うのか。

回答：授業の終わりに行う小テストか、配布したプリント等に自己評価項目を加えて「（学び合いが）よくできた～できなかった」等の段階による自己評価を実施している。

質問：このような『学び合い』授業を毎時間行う気持ちはあるか。

回答：（授業者６人の回答を列記する。）

- 毎時間このスタイルで行っている。
- 化学は教科書を読んだだけでは理解が深まらない。分野によって授業スタイルを使い分けていこうと考えている。
- 地歴や公民の教科書の記述からだけでは生徒が理解するのは難しい実態がある。当面は杉山教諭と同様の考え方で進める。
- 自分の前任校時代の経験でも、考査前に自習形式で『学び合い』をしていた学級は平均点が高かった。学び合いは効果が高いと考えている。
- 少しずつ『学び合い』の割合を高めていこうと考えている。
- 講義形式、学び合い、どちらのスタイルも取り入れていきたい。『学び合い』は教えてもらえるから好きだ」という生徒もいれば「講義形式でノートを作りたい」という生徒もいる。どちらの声にも応えたい。

意見・感想

- 『学び合い』がスタートした後、教員が指示・説明する場合は、一度、『学び合い』や作業を止めさせるべきだろう。
- 有恒高校では数学で学び合いを導入している。生徒は数学の時間中は、ずっと数学を考えているという声が聞かれる。『学び合い』の準備は大変だろうと思う。

指導・助言（要旨）

① 上越教育大学　西川　純　教授

- 『学び合い』は基本的に、スタートしたら途中で指示・説明をすることはないが、どうしてもしたい場合は大きな声で誰に言うともなく「こんなふうにすれば良いのになぁ」と声を上げれば良い。
- 全ての授業で『学び合い』を実践している教員は多い。やり方の問題はあるが、教員それぞれのイメージどおりにやってほしい。

② 上越教育大学　中平　一義　准教授

- 大貫教諭の授業は、イギリスのメディアリテラシーの授業に似ているスタイルで、事実と意見を区別して読み取ることを重視している。
- 特に若い人は、自分の意見に含まれないことがあると、事実を意見としてねじ曲げて解釈する傾向がある。この点において、有効な授業であった。

③　高等学校教育課　菅　一典　指導主事

・　本事業の指定は３年間である。これまで積み重ねてきた取組を総括し、今後の発展的な取組につなげ、生徒にとってよりよい授業をめざしてほしい。

・　学び合いで生徒に任せることは、教員には勇気のいることである。教材研究や問いなど教員が研修しなければならない部分が大きい。

④　ＮＩＥコーディネーター・新潟商業高校　蟻塚　宰子　教諭

・　大貫教諭の授業で印象に残っているのは、生徒が社説を読もうとする気持ち、わからない漢字を調べようとしていたことである。

・　例えば「リテラシー」など、大人がわかるだろうと思った言葉が子どもにはわからなかったりする。

・　それぞれの意見を聞くことで、意見が違ってもいいんだよ、ということが生徒に伝わったと思う。

⑻ 電子黒板の教室固定化

教職員が教室に行って、電子黒板を使った授業をすぐ始められるよう、２台ある電子黒板を、２教室それぞれに固定し、スイッチを入れれば使用できるようにした。それにより、毎時間、電子黒板を使用する教職員も出てきた。ただし、下にあるプロジェクターが上のスクリーンに投影される場合、電子ペンの反応が悪く、電子ペンによってスクリーンに書き込む形式の演習がやりづらくなっている。プロジェクターを教室の天井から吊り下げることができる器具を購入し、設置工事を行うなどの対応が必要である。

【取組の成果】

１　学校設定教科「ステップアップ」の指導の充実

「ステップアップ２」「ステップアップ３」に対しては教育課程委員会で１年間、充実した議論を行い、久比岐高校に適したカリキュラムを作ることができた。

２　「主体的・対話的で深い学び」のための指導方法の改善

次の成果があり、課題も見つかった。

＜成果＞

・　『学び合い』について、２月のアンケートにおいては、生徒の 70%近くが授業は楽しいと回答し、85%近くが力が付くと回答した。主体的・対話的で深い学びに繋がっていると考えられる。

・　各教科で『学び合い』授業を見学し、上越教育大学院生との研究協議会で協議を実施したことによって、当校における『学び合い』授業の方法、目標が明確になり、『学び合い』授業をどう自分の授業に取り入れていくか、考える機会ができた。

・　「学び合い推進委員会ＮＥＷＳ」を発行することにより、各校の公開授業や、『学び合い』の会の情報などを周知できた。また、各教員の協働学習に対する意識の高まりや試行錯誤に繋げることができた。

・　授業公開週間を設けることにより、校内で気軽に他の教員と授業についての意見交換ができた。それぞれの授業の質が向上する機会を創出した。

・　授業公開週間では副産物的に、各教員の担当授業以外での、生徒の様子、学級の様子を観察できることとなり、生徒の指導や声かけに役立った。

＜課題＞

・　『学び合い』の授業を行ってみて、生徒の学力を向上させるには「学び合いを実施した結果、生徒が積極的に学びました」というだけでなく、何か「＋α」の手立てが必要であると率直に感じる。その手段を試行錯誤しながら試してみる必要がある。

・　研究協議会では常に「授業規律」や「生徒が教員の話を聞く時間の設定も大切」等の意見が聞かれる。出前授業は学び合いモデルの１つであり、教員が教科・科目や単元、各授業における目標に応じた工夫が必要である。

＊指摘された問題（特に１学期）＊

・　『学び合い』授業２年目となる２年生では、雑談に興じる等、学習に十分に取り組めない生徒が増加した。
・　授業で示される課題の、難易度が高い場合には諦め、活動しない生徒もいる。その生徒を助ける生徒がいない場合も多く、『学び合い』にならない。
・　前述の２点はリーダー的生徒の気分的な状況で程度が決まり、授業規律が保てない。
・　他者とのコミュニケーションにストレスのある生徒から『学び合い』に対する否定的反応がある。
・　２年生は教室が騒がしくなり、教員の指示が生徒に徹底しない状況が多い時期があった。（学年集会等での繰り返し注意、特別指導の実施によって現在は大きく改善した。）

＜改善策＞

上述した課題を解決するために、有恒高校の授業を参考に、次のことを試行してみたい。

・　『学び合い』授業をするためには、『学び合い』ができるクラスを作ることが前提である。そのためには、『学び合い』のルールを明確にし、妥協しないことである。その精神は、「『学び合い』は何でもありではない。教える側も教えられる側もお互い気持ちの良い授業をする。他人に授業を見られてまずいと思われる行為はしない」といったもので、具体的には、教室内でしゃがまない、廊下に出ない、教科と関係のない話はしない、寝ない、課題を早く終えた生徒は必ず終わってない生徒の応援に行く、他人の机で学び合うときは、自分の椅子を持って移動するなどである。そして、毎時間、『学び合い』の態度を評価することを最初に明言する。
・　リフレクションシートを、学期始めに毎日提出させる。リフレクションシートとは、授業の終わりに行う自己評価シートである。
・　『学び合い』活動で課題を早く終了し、他の生徒に教えることができる成績上位者を育てるために、週末課題を出し、提出を求める。

３　ＩＣＴ教育の充実

電子黒板２台を２教室に固定し、教職員が使用しやすくなった。演習科目で、常時、電子黒板を使用する科目が出てきた。

【総合所見】

本校の特色の１つである、学校設定教科「ステップアップ」を実践しながら、教育課程委員会で適宜見直し、よりよいものにしていきたい。

また、『学び合い』の課題を解決するため、改善策を『学び合い』推進委員会で協議し、授業で試行していきたい。

最後に『学び合い』のために環境を整備することが重要である。アクティブラーニングで必要な電子黒板および周辺機器をより使いやすいものにしたい。

（様式１）　　羽 高 第 ２１１ 号

令和２年３月１１日

高等学校教育課長　様

学番 ７９　　県立羽茂高等学校長

明日の新潟の飛躍につながる魅力ある学校づくり推進事業について、下記のとおり報告します。

記

羽茂高校
【テーマ】　「社会に開かれた教育課程」 **～地域と連携した特色あるコースの設置に向けて～**
【目標】 令和２年度から予定されている「地域と連携した特色あるコース」の設置に向け、佐渡の文化や産業などの地域資源を活用した校外活動やキャリア教育、インターシップを推進し、地域連携による「社会に開かれた教育課程」の構築を図る。 **【取組の概要】** １　１年生が来年度から本格的に始める地域探究「佐渡学」を先行して実践とした。 (1) 体験活動として「校外活動」や「島内の企業見学」を行った。 (2) １年生全員と２、３年の希望者が「英語観光ボランティアガイド」を行った。 (3) 新潟国際情報大学　准教授　山田　裕之様とゼミ生を招き「国際理解学習」を行った。 (4) 「佐渡学」を通じ、佐渡の文化・歴史などを学んだ上で地域の課題について発表した。 ２　ボランティアを募り、来年度に行う地域探究活動を先行的に実践した。 (1) ７月にビジネスプラン・グランプリ講演会を実施し、地域おこしのアイデアを考え９月に応募した。 (2) 佐渡汽船の広報担当者など、地域で働く人々と地方創生のアイデアを話し合った。 (3) 12 月にマイプロジェクト in 南魚沼で発表を行い、他校の高校生と交流した。 現在も活動し、実践に向けて準備している。 ３　ＩＣＴを使った授業を実践するため、Ｗｉ－Ｆｉ環境を整えた。また、地域探究活動での発表やグループ活動、学習支援サービスを利用するためタブレットを導入した。 ４　地域と連携している「先進校視察」として山形県立小国高校と新庄北高校を訪問した。 ５　佐渡市や大学、地域の産業などと連携し、コンソーシアムを立ち上げた。 ６　「羽茂高校だより」を地域に回覧した。また「地域探究コース」パンフレットを作成した。 **【取組の成果】** 本年度の取組をもとに、特に「地域探究コース」のための地域探究学習を計画し（Plan）、先行して実践した。また並行して、来年度の環境を整えた（Do）。来年度は、本年度の取組を再度 Check し、「地域探究コース」の取組を Action し、PDCA サイクルで本校の魅力を高め、地域探究を通じて学びへの感動や学ぶ喜びを呼び起こし、自律した学習者と地域を担う人材を育成していく。

1　佐渡学について

【取組の内容】

(1) 現地研修

ア　職場見学〈令和元年７月 29 日〉

㈱佐渡乳業様、新穂愛宕の園様、航空自衛隊佐渡分頓地様を訪問した。現在の島内の産業や社会を知る機会となった。

イ　校外活動〈令和元年 10 月 23 日〉

佐渡に自生する自然を学ぶため「石名天然杉」を訪問した。また、昨年開業した佐渡金銀山を学べる「きらりうむ佐渡」を訪ねた。島内の観光、歴史、自然など様々な側面を体験することを通じ、地域の課題を考察した。

(2) 宿根木現地英語ボランティア研修〈令和元年６月 26 日、７月 27 日、８月 17 日、11 月５日〉

１年生全員には英会話の授業として、また他の学年の希望者に対して「英語観光ボランティア」の実践を、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている宿根木で行った。

観光ボランティアガイド講習会の開催〈令和元年 10 月２日〉

佐渡市羽茂在住の全国通訳案内士　前田　富士子様をお招きし、１年生に対して英語ガイドの心得や英語や歴史、文化の勉強方法、英語やガイド、異文化交流の魅力を伝える講演会を行った。生徒にとって地域の新たな魅力の再発見、学習への姿勢など専門家から直接学ぶ機会となった。

(3) 国際理解学習〈令和元年 10 月 21 日〉

社会を様々な角度から学ぶため、新潟国際情報大学准教授　山田　裕之様とゼミ生を招き「世界の不平等～ファストファッション服から見てみる不平等～」と題して、大学生が講師役になり、本校生とグループ学習を展開する「国際理解ワークショップ」を行った。

(4) 佐渡学発表会〈令和２年２月５日〉

体験活動を通じて佐渡の課題を生徒自らがまとめ、発表会を行った。

【取組の成果】（生徒の感想）

「総合的な『学習』の時間と『探究』は所詮同じだろう」「佐渡学といっても見学とまとめ発表だけだろう」と思っていました。しかし、先生から「問題提起をしてください」の一言で『探究』に添っていないと焦りました。情報という莫大な知識は、自分で考え活かすものだと思いました。

２　地域探究活動について

【取組の内容】

(1) ビジネスプラン・グランプリ講演会〈令和元年７月９日〉

「答えのない課題に挑戦する時代において、地域の課題を考える」ことを目的に日本政策金融公庫　小川竜興様をお迎えし、講演会を実施した。その後、図書館でビジネスプランの企画作成方法を学ぶワークショップを実施した。

赤泊地区地域おこし協力隊　渋谷　春奈様からご支援をいただき、夏休みなどで話し合いを重ね、２年生の希望者４名でビジネスプラン･グランプリに作品を令和元年９月 25 日応募した。

(2) 地域で働く人々や地域おこしを考える社会人との交流〈令和元年８月 19 日、12 月９日等〉

一般社団法人佐渡観光交流機構が推進する地域商品企画を考える発表会（フェノロジーカレンダープロジェクト）が本校を会場に開催され、見学を希望した高校生も一緒に、地域の課題へのアプローチを学んだ。また、本校でタネクリエイティブ㈱様、佐渡汽船㈱営業部 PR 推進室様と広告やホームページの見せ方、商品開発などについて意見を交換した。

本校で行われた地域おこしを考える社会人の発表に高校生も参加（８月 19 日）

佐渡汽船 PR 推進室様、地域おこし隊の渋谷様、本校生徒・職員で意見交換（12 月 9 日）

(3) マイプロジェクト☆LABO in 南魚沼〈令和元年 12 月 14 日、12 月 15 日〉

マイプロジェクト in 南魚沼で発表した。また、他の県内外の高校生や地域活性化に取り組む社会人、大正大学地域構想研究所教授　浦崎太郎様、Idea partners 代表　山本一輝様、新潟県異業種交流センター理事長　小林元様、愛・南魚沼みらい塾代表理事　小林昌子様などの専門家と交流し、生徒にとって大きな刺激と学びを得た。

マイプロジェクトで発表　　他校の高校生と意見交換　　生徒考案のゆるキャラ

【取組の成果】（生徒の感想）

- 将来の進路でも役に立つと思い参加した。それ以上に、地域を考える社会人、専門家や他の高校生などと深いかかわり持つことができたことは、大きな財産、経験になった。
- 最初は、今後の進路を考えて参加し、先生方が進めてくれたが、次第に自分の「やりたい」気持ちが強くなった。楽しいだけでなく、自分のためにもなるし、とてもいい機会となっている。

３　ＩＣＴの整備について

同窓会の協力を得て、Wi-Fi 環境を整えた。現在は、主に授業で動画を見せることや調べ学習に活用している。また、本事業の予算から地域探究活動での発表やグループ活動、学習支援サービスなどに利用するためタブレットを導入した。今後は、島内外とインターネットで結んだ交流授業など、活用方法を研究していく。

さらに、ＩＣＴを活用した学習支援サービスに加入し、ポートフォリオの蓄積とそれを活用した生徒面談、進路支援など、生徒の学習と進路への支援や、アンケートや課題、学年だよりなどの配信、回収、集計など教員の負担削減のために活用していく予定である。

４　地域と連携している先進校視察について〈令和元年 11 月 19 日～20 日〉

【目　的】令和２年度に開設する「地域探究コース」「文化教養コース」の準備のため、地域探究学習について先進的な取組をしている学校を視察する。

【訪問先】山形県立小国高等学校、山形県立新庄北高等学校

【概　況】・　両校とも昨年度から文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定校となった。市町村を中心としたコンソーシアムが形成されており、それ以外に高校を応援する会が存在している。

・　小国高校は 20 年弱「連携型保小中高一貫教育」を実践している。「国際理解教育」「情報教育」「地域学習活動（＝白い森未来探究学）」を柱に、アメリカ短期留学、ボランティア活動、全国高等学校小規模校サミットの主催、アントレプレナーシップと称したキャリア教育などの課題解決能力、合意形成能力などに秀でた生徒の育成を目指している。

・　新庄北高校は、平成 30 年度から普通科に探究コース（40 名）を設け、３年生で研究発表実践を行う。地域理解プログラム、市や県、ＮＰＯなどが主催する各種講座「ジモト大学」の参加、地域連携部など地域探究を実践する場面が設定されており、スマホのアプリでポートフォリオをまとめている。コースの生徒は週２時間の総合的な探究の時間と放課後活動などで探究学習を深めている。

【参加者】本校職員２名（教頭、教諭）

【成　果】・　地方の少子高齢化、人口減で地元の高校の存続に対して高校と市町村危機感と問題意識を感じ、同じ方向を向いて活動をしていた。

・　地域探究活動のコーディネーションを行う人材やそれを様々な場面で支援する人々がおり、チームとして機能することが大切であることを学んだ。

・　本校で地域探究活動の実践への動機付けになった。また、実践で考慮する点や問題点などを考える機会となった。

小国高校に掲示されていた生徒の取組

新庄北高校の授業の様子

５　地域コンソーシアム設立

探究学習を推進するため、佐渡市、佐渡市教育委員会や大正大学、新潟工科大学、佐渡観光交流機構、県立学校などと連携し、コンソーシアムを立ち上げた。また、佐渡総合高校と共に文部科学省事業「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」に応募した。

６　パンフレット、羽茂だよりの発行

「地域探究コース」を紹介するため、学校案内を作成し、学校説明や中学校訪問などで活用した。また、本校における活動を発信するため「羽茂高校だより」を作成し、地域に回覧し、周辺の小中学校にも配布した。

コースパンフレット

羽茂高校だより

７　取組の成果・総合所見

【取組の成果】（生徒の感想以外）

・高校生活の満足度を各学年 85％：１年生 87％、２年生 81％、３年生 80％

・転退学者を０とする：　３年生１名退学（３月１日現在）

・卒業後の進路決定率を 100％：達成

・入学志願倍率の増加：一般選抜志願者倍率 0.62 倍（昨年 0.31 倍：定員減により倍率に変更）

【総合所見】本年度は、令和２年度から本校に開設する「地域探究コース」の準備を進めてきた。１年生を中心に行った「英語ガイド養成講座」を軸にした「佐渡学」は、生徒に地域への理解や提言を考えることを促した結果、新旧各種行事が有機的に結ばれた。生徒からは「意義」を感じる取組となったとの感想を得た。これに加えて、ビジネスプラン・グランプリやマイプロジェクトに参加した取組においては、実際に係わった教員、生徒はもちろんのこと、他の教員、生徒や地域の人々に具体的な地域探究活動のイメージが伝わった。この結果、生徒は活動が定着するにつれ、教員が促さずとも話し合い、準備をするなどの自主的に行動する姿が見られた。教員も新たな企画を立案するようになるなど、積極的に活動する様子が見られた。企業・団体や大学などからも連携の打診があり、コンソーシアムの設立や地域おこし協力隊員との連携も実現した。

【今後の取組】令和２年４月から、いよいよ地域探究コースの取組が始まる。離島が抱える諸問題に対して、ＩＣＴの技術を活用し、離島にいながら様々な場所に住む人々や世界を感じ、考える授業を展開する。また、地域課題の解決を通じ、体験と実践を伴った探究的な学びができる普通科高校として学校を改革することで、生徒が自らのあり方を主体的に俯瞰する力を育む。また、全国的に生徒数が減少する中で、教員の働き方を見直し、組織、行事などのあり方を見直しつつも、地域探究活動で高校や地域が活性化する取組を提案、企画、実践していく。